

0 歳児の誕生をめぐる「危機」と 0 歳児保育の課題

— さくらんぼ保育園における '81 年度の 0 歳児保育から —

村 知 穂 三

〈初めに〉

〈1〉 0 歳児の誕生をめぐる「危機」 — 妊娠・出産時の母子の状況 —

〈2〉 乳児期後半における「移動能力」の獲得と感情・認識・交流の発達 — 3 名の 0 歳児の入所
後 1 年間の発達経過

〈おわりに〉

〈初めに〉

通常40週間前後におよぶ胎生期をへて新生児が誕生する過程には、彼のその後の成長・発達を考えるうえでみのがすことのできない幾つかの危険な要因⁽¹⁾をはらんでおり、しばしばそれが外在化されるケースがある。'81年度のさくらんぼ保育園※0歳児クラスに入所・所属した子どもたちの場合もそうであった。

※ 同園は埼玉県深谷市にあり、社会福祉法人さくら会（国吉真弘理事長）に所属する3保育所、1学童保育所のひとつである。1967年に設立され、1971年に認可を受けた。

他の2つの保育所はさくら保育園・第2さくら保育園であり、さくら・さくらんぼ保育園と通称されているのは以上の3園のことである。なお本稿では、例えばさくらんぼ保育園を「さくらんぼ」というように略す。

他方で、子どもたちは「自らを自らで変え育てる力」をその存在の本質的側面・可能性としてもっていることも確かである。0歳児（乳児）保育実践のひとつの課題であると同時に最大の能力は、前述のような0歳児の「生まれの弱さ」を彼らのその後の変化・成長・発達のなかで弱点や障害などとして増大化・固定化させるのではなく、彼らのもっている可能性を現実性に転化するような環境条件や人間的働きかけ・交わりをつくり出し、彼らの人間的発達を保障することにある。

「さくらんぼ」では「さくら」以来の20数年間の0歳児保育の経験の積み重ねのなかから、0歳で入所した子どもが「生まれの弱さ」をのりこえていくひとつの时期的なめどとして、仮に満2歳までを考えている。言いかえれば、乳児期後半から幼児期前半※への移行をとげる頃まで、である。

※ 本稿では、仮に新生児期（出生後から生後10日から2週、さらに広くは4週まで）を含み生後6、7か月頃にいたる前までを乳児期前半、それをこえ1歳半ば前後までを乳児期後半とする⁽²⁾。このため本稿中で0歳児という場合は、より適切には上記でいう乳児期にある子どものことを意味している。「さくらんぼ」では保育者がこれらの用語の使いわけに十分に留意してはいないが、保育の実際においては、拙稿⁽³⁾ですでに述べたような1歳すぎから半ば前後をみとおしたいわば0歳児像・0歳児観をもち、同時期までの子どもを0歳児クラスにおき、それをこえた子どもは「移行」という処置により年度途中でも随時1歳児クラスへ移っている。また「幼児期前半」の規定については注(4)の文献を参照。

本稿は、まず1節で、0歳児クラス所属児童全員を対象に行なった、彼らの胎生期・新生児期を含む入所までの育成経過調査の若干の特徴的な点について簡単にふれる。次に2節で、先の0歳児のなかから3名のケースをとり出し、彼らが入所後1年間で自らを変化・成長・発達させていった過程を、とりわけ「移動能力」の獲得と感情・認識・交流等の発達という点から、主に乳児期後半を対象に、たどる。

以上の報告・検討を通して、0歳児保育※のあり方を、それと家庭などでの育児との関係から、

あるいは母子関係論の眼から検討しようとする近年の論議にたいして、保育の実際にたずさわった者の立場からささやかな素材を提供したい。

※ 本稿では以下単に0歳児保育という場合には、保育所におけるそれをさす。文脈上その点を明確にするために、特に保育所保育などということもある。

〈1〉 0歳児の誕生をめぐる「危機」 ―妊娠・出産時の母子の状況―

この10年足らずの間「さくらんぼ」では0～5歳までの新入所児全員を対象に、その（両）親から面接・聞きとりという形で、一人ひとりの子どもの家庭環境、妊娠・出産時の母子の状況、言いかえれば胎生期・新生児期を含む入所にいたるまでの子どもの成育経過などについて調べ、記録することになっている※。生後間もない赤ちゃんをあずかる0歳児クラスの場合は、特にていねいにそれを行なう。

※ この際、5年ほど前から何回かの修正をへた別表1の記録用紙を用いている。ただこの記録用紙に欠けているもの一例えば、飲酒・喫煙（喫煙については母親のみでなく父親を含む家族全員について調べる）の有無とその量など、胎盤の大きさと重さ、出生児（新生児）の身長・頭囲・胸囲、初乳を生後何時間目にのませたか、出産直後に（母）親は新生児を抱けたか否か、病院・助産院では母子同室か異室か、異室の場合は生後何日目に新生児は母親のもとにきたか等々は随時補足していつている。

(別表・1) 妊娠・出産時の母子の状況の調査表(さくら・さくらんぼ保育園)

児童名	生年月日	入所年月日
-----	------	-------

家 族 構 成		家 庭 環 境	
氏 名	生年月日	職 業	勤 務 先
父			
母			
		家屋	自宅、借家、アパート、社宅
		間数	
		採光	(ひあたり)
		騒音	静、騒、普通
		既 往 症	
入所時までにかかった病名と、その状態について、できるだけ詳しく書いて下さい。(湿疹 その他について)			
○夫婦間の血縁関係がある場合、詳しく記入して下さい。			
○妊娠中の異状について (その1)			
・途中に出血はありましたか			
(あればいつ頃)			
(どんな状態)			
・中毒症はありましたか			
・切迫流産はありましたか			
はい . いいえ			
(あればいつ頃)			
・さかごでしたか			
はい . いいえ			
(状態、時期)			
・妊娠中の感染について、()ヶ月頃かも書いて下さい			
○つわりの状態はどうでしたか			
(食事の状態も詳しく書いて下さい)			
・妊娠中に、家庭上、または仕事上その他で、心理的ストレスがありましたか			

妊娠前 及び 妊娠中の状況について	
○妊婦の仕事の内容	
いつまで続けましたか	
負担だったらその理由	
○車の運転はいつまでしましたか	
○妊娠前の栄養状態(平常)	
偏食はありましたか	
特に甘いものが好きですか	
食事は良く食べれましたか	
○妊娠前の健康状態(貧血症、他)	
○流産・死産の経験は	
なし . あり	
あれば 流産()回 死産()回	
○長期にわたる(2年以上)避妊はありましたか	
はい . いいえ	
○妊娠中の腹部X線照射があれば	
いつ頃	
何 故	
○妊娠中の注射・薬物投与がありましたか	
はい . いいえ	
あれば、いつ、何を	

○妊娠中の異状について (その2)
慢性病(糖尿病・腎臓病・ぜんそく・他)がありましたか

RH因子について
血液型不適合について
胎児の心拍数は正常でしたか はい . いいえ
心搏動は規則的でしたか はい . いいえ
貧血はどうでしたか

血圧は正常でしたか

蛋白尿と 浮腫はありましたか
○ ○

出 産 時 の 状 況

○分娩の状況 正常 帝王切開
鉗子分娩 吸引分娩 その他

○分娩時に、陣痛促進等のため、注射、投薬、その他を受けましたか、局所麻酔などしましたか

○陣痛時間 ()時間
陣痛は強かった 弱かった

○破水してから生まれ出た時までの時間

○羊水は透明でしたか

○頭位分娩でしたか はい . いいえ
(状態)

○在胎期間 満期出産 ()日早い
()日遅れる
○分娩の場所 病院 診療所
助産院 自宅

出産時の児の状況について

○体重()g
○生まれてすぐ産声をあげましたか
はい . いいえ
(どの位経過しましたか その状態)

○へその緒を巻きつけていましたか
いたらその状態を詳しく書いて下さい

○うぶ声は 大きかった . 小さかった

○特別な処置をうけましたか
保育器に ()日入っていた .
人工蘇生・酸素吸入・交換血液・薬物投与など、
他をうけましたか

○体温は正常でしたか はい . いいえ
○生まれた時の皮膚の色は
正常 蒼白 赤すぎる 黄疸
チアノーゼ等 記入して下さい

○嘔吐・けいれん・後弓反張反射・他がありましたら詳しく書いて下さい

○頭に血腫・産瘤・非対称性はありましたか

○泉門の大きさについて書いて下さい(緊張の変化、膨隆、陥凹がありましたら書いて下さい)

○顔の表情・非対称性・目のまわりに浮腫はありましたか

○手は握っていましたか はい . いいえ

○初乳は飲ませましたか はい . いいえ
○哺乳の力はどうでしたか

○授乳状況
母 乳(から まで)
ミルク(から まで)、
混 合(から まで)

こうした調査・記録を今日のような形でいわば保育の出発点として明確に位置づけた理由として、少なくとも次のものがあげられるであろう。①入所児の変化・成長・発達の状況が、特に'70年代半ばごろから年ごとに変化してきており、それ以前の保育のやり方だけでは充分に対応できなくなってきたこと。なお、この点では彼らが生まれ育った地域の社会的・文化的変容の影響についても考慮しなければならない。②古くから胎教という言葉でもいわれているように⁽⁵⁾、また近年いくつかの異なった分野の科学者・研究者らがくりかえし発言しているように⁽⁶⁾、子育て・育児・保育といった営みはいわば妊娠とともに始まっていると考えられ、保育者もその点に留意しなければ、眼前の子ども、特に0歳児をより多面的に把握できないこと。③仮に保育を系統発生と個体発生との関係⁽⁷⁾という眼からみていくことにより、子どもへの愛情という基盤のうえに彼らへのより科学的な接近方法を保育者集団としてつくり出していきたいと考えていること。④子どもの数、保育者・職員の数とも増大化し、施設も大規模化していくなかで、ひとつにはクラス担任らのみが受けもちの子どもたちの状況をつかんでいるだけではなく、保育者・職員集団が全園の子どもたち一人ひとりを知っているという条件を維持していくことが困難になってきていることから、ふたつにはクラス担任者の変動があっても保育所としての責任をもって最長6年数か月間にわたり子どもを受けとめていくためにも、個々の子どもの生育歴を記録として保育者集団の前に提出し残していく努力が不可欠となってきたこと。

これらの調査・記録の結果の一部はすでに幾つかの場で発表されているが⁽⁸⁾、ここでは、'81年度の0歳児クラス所属児童19名（その所属期間は1～12か月までひらきがある）のうち、0歳児期を在宅ですごしたE児（満1歳で入所、いわば慣らし的に'81年9月の1か月間のみ0歳児クラスに所属する）を除く18名について先の調査を行なった結果を表1としてあげる。また、それとの対比という意味から補足的に、'82年度の1歳児クラス及び'83年度の2歳児クラスへの入所児に対する同様の調査結果もあげる（別表2）。そのうえでこれらの表について、保育の実際にたずさわった者の立場から、0歳児保育（乳児）の内容を考えていくうえで考慮しなければならないと思われる幾つかの点について述べたい。

なおこれらの資料についてあらかじめ次のことを断っておかなければならない。①これらは、既述のように、入所時の面接等で（母）親からききとったり、書き込んでもらったものをもとにしているため、その内容を母子手帳などで確認してもらったが、特に別表2のように、出産後1年から3年近い期間がたつにつれ不確かになる部分があったこと。②この面接時の調査を担当保育者集団がまとめ、年3回ほど開かれた「さくら」「さくらんぼ」「第2さくら」8園合同職員会議へ提出した記録を、筆者が作成し直したものが表1・別表2であること。③いわば当然ともいえるが、医学的特に産科学的・新生児学的な知識・知見には大いに弱さをもっているであろうこと。

(表・1-1)

名前 (性別)	生 年 月 日 (入所年月日)	出産時 の母の 年 令	兄弟と の年令 差	父 母 の職業	母 胎 (体) の 状 況 (胎 生 期)								
					妊 娠 前 の健康状態	いつまで仕 事をしたか	いつまで車 の運転をし たか	甘いもの	血 圧	尿蛋白	貧 血	つ わ り	その他の異常特記事項
A (女)	' 8 0.4.1 1 (' 80.6.1「さくら」 ' 81.4.1「さくらんぼ」)	2 9	姉 4	会社員 保母	良好 (低血圧)	産前 8 W	出産 2 日前	普通	正常	6 M、8 M の 2 回	あり	普通	妊娠前期 3 か月間休業
B (女)	5.1 4 (' 8 0.7.1)	3 1	兄 6	教師 (高校) 保母 (年長児クラス)	良好	6 W	〃	〃	〃	1 度土	少しあり (7 4 %)	前半あったが食べら れた	妊娠前期 3 か月間休業 これまでに 2 回流産していたの で流産止めを受ける
C (女)	6.1 7 (9. 1)	2 8	姉 3	公務員 (深谷市) 公務員 (深谷市事務職)	〃		出産するま で	〃	〃	なし	あり	なし	8 M頃 : 増血剤 (注射) 長期避妊
D (男)	7. 6 (9. 1)	2 9	姉 2	会社員 家事	〃	—	〃	好き	〃	後半にあり	あり (9 M ~)	3 ~ 4 M嘔吐ひどい が食事は普通	9 ~ 1 0 M : 増血剤 (注射 ・ 薬)
F (男)	1 1.1 3 (' 8 1.3.2)	3 0	兄 6 姉 4	治療士 (接骨院) 保母 (2 才児クラス)	〃	6 W	出産 1 M 前	普通	〃	なし	なし	胸がむかつく程度、 よく食べられた。	長期避妊
G (女) H (女)	1 1.1 9 (4. 6) 一卵性 双生児	3 2	兄 4	公務員 (群馬県) 保母 (公立 2 才児ク ラス)	疲れやすか った	7 W	7 W 前	嫌い	〃	なし	あり (鉄剤投与)	よく食べたが嘔吐ひ どく、特に朝食後、 通勤途中も車中によ く吐いた。	長期避妊後、排卵誘発剤のむ。3 M 頃出血する (2 週間入院)。切迫流 産予防薬をのむ。 2 9 M : 逆子 出産 2 ~ 3 日前に X 線照射。
I (男)	' 8 1.2.9 (4. 6)	2 3	—	障害児収容施設指導 員	良好	6 W	6 W 前	普通	〃	6 M 出る 7 M ごろに 浮腫	あり (5 7 %)	殆どない	4 M 頃に妊娠中毒症、切迫流産。4 M 頃から増血剤 (注射)。
J (男)	2.1 9 (5. 1)	2 8	—	ともに農業	貧血症 頸肩腕障害	入院前まで	1 M 前	好き	初期100/60 ~ 100/70 9 M から 120/70	なし	血色素 2M : 10.2 (6 4 %) 8M : 10.5 (6 6 %)	気持ち悪くなり、3 ~ 4 回吐気あり、食 事は普通にたべた。	前半、後半に 2 回食あたりをおこし、 注射と投薬 5 M 頃まで精神的に不安定

(表・1-2)

名前 (性別)	出 産 時 の 母 子 の 状 況									
	陣痛時間 (と強さ)	在胎期間 (予定日に対して)	出産のための特 別 な 処 置	子どもの(特別な)状態 (破水後何分で出産)	産声 いつあげた か(強弱)	出産後の特別な 処 置	手指の 握 り	初 乳	生下時体重 (g)	※ 出産場所
A	12h (普通)	満期	なし	破水後2h	すぐ (普通)	なし	開	飲	3,150	〇〇病院
B	6~7h (普通)	7日早	なし	破水と同時に	すぐ	なし	握	飲	2,850	〃
C	26h (弱)	6日遅	なし	前期破水	すぐ (大)	なし	握	飲	3,550	〃
D	—	7日早	局所麻酔 帝王切開		すぐ (大)	なし	握	飲	3,550	〃
F	4h25m (強)	12日遅	陣痛促進剤(薬)	破水後30m	すぐ (大)	なし	握	飲	4,460	〃
G	—	8日早	全身麻酔 帝王切開	軀幹淡紅で四肢にチアノーゼ (+)	あげた (大)	保育器2日間	握	飲	2,610	〃
H				軀幹淡紅で四肢にチアノーゼ (+) 嘔吐。アプガー点数 (1分6点、5分9点)	あげた (弱小)	保育器3日間	握	飲	2,540	
I	6~7h (強)	3日早	産道を作るための薬2種投与	破水後16h 臍帯巻路	1~2分後 (普通)	なし	握	のまな い	2,860	〃
J	23h (弱)	満期	陣痛促進剤 (注射)	黄疸が強く、2日後に転院。羊水 感染症。皮ふの色茶白。右耳下後 頭部に脳内血腫。頭部臍帯巻路。	5分後 (弱小)	△△病院へ入院 光線療法。保育 器21日間。	?	飲	2,500	〃

※病院名は略した

(表・1-3)

名前 (性別)	生 年 月 日 (入所年月日)	出産時 の母の 年 令	兄弟と の年令 差	父 の職業 母	母 胎 (体) の 状 況 (胎 生 期)								
					妊 娠 前 の健康状態	いつまで仕 事をしたか	いつまで車 の運転をし たか	甘いもの	血 圧	尿蛋白	貧 血	つ わ り	その他の異常特記事項
K (女)	3.18 (6.1)	25	—	会社員(自動車教習 所) 保母(2才児クラス)	良好	産前 6W	1W前	好きだが妊 娠中は食べ ない	120/70	5~6M頃 に土になる	あり	3~4回吐く	3M~増血剤
L (男)	3.25 (6.1)	34	兄 9 姉 2	自営(高板関係) 保母(0才児クラス)	良好	6W	出産するま で	普通	正常	9M頃軽い 浮腫、土	4M~ 4~64% 後半~ —72%	普通	これまでに2回流産
M (男)	3.27 (「さくら」6.1 「さくらんぼ」11.1)	31	—	団体職員 家事	—	—	2M前	嫌い	〃	37Wから 土	なし	初期に食欲がなくな る。	10M後半に蛋白の出をおさえる薬 及びかぜ薬をのむ。
N (女)	4.29 (9.1)	31	—	団体職員 保母(1才児クラス)	血圧低め	7W	2M前	〃	予定日2日 すぎに高くな る	予定日すが て土になる	なし	時々はげしい頭痛、 初めは冷や汗が出 た。キュウリ・肉が 食べたくなかった。	3.13.16W 出血 W切迫流産(注射・薬) 41W腹部X線照射
O (女)	5.5 (10.1)	26	姉 4	会社員(スーパーマ ーケット) 保母(病気休職中)	貧血症 頸肩腕障害	—	1M前	〃	高かった	あり	貧血症	なし	長期避妊 2M~増血剤(注射・薬) 5M かぜ薬 10M 腹部X線照射
P (男)	6.24 (8.24)	32	兄 3 兄 1	団体職員 保母(4才児クラス)	良好	6W	出産前日ま で	好きだがひ かえた	正常	1回あり	7M: 68%	なし	7~9M 増血剤
Q (男)	7.12 (9.1)	33	姉 2	団体職員 保母(1才児クラス)	〃	7W	—	嫌い	〃	土2回 塩分の制限	なし	4Mまで食べると気 持ちわるかった。	8.9M 腹部X線照射
R (男)	8.7 (11.1)	33	兄 9 姉 5 姉 1	団体職員 保母(2才児クラス)	〃	6W	出産2日前 (バイク)	普通	〃	土が 1~2回	軽い	なし	増血剤(3日間)
S (男)	8.10 (10.1)	25	—	運転手(青果会社) 事務員	〃	4W	2M前	〃	〃	9~19M に+	あり	空腹時に吐き気、食 事は普通より少なめ	4M 腎 炎 8M 増血剤

(表・1-4)

名前	出 産 時 の 母 子 の 状 況									
	陣痛時間 (と強さ)	在胎期間 (予定日に 対して)	出産のための特 別 な 処 置	子どもの(特別な)状態 (破水後何分で出産)	産声 いつあが たか(強弱)	出産後の特別な 処 置	手指の 握 り	初 乳	生下時体重 (g)	※ 出産場所
K	48h (弱)	2日遅	なし	臍帯巻路(頸部)	すぐ (大)	なし	握	飲	3,100	△△病院
L	48h (強)	3日早	なし	同時破水	すぐ (大)	なし	握	飲	3,650	〃
M	12h45m (強)	2日遅	なし	破水後1h 上まぶたに浮腫	すぐ (大)	なし	握	飲	2,960	〃
N	12h54m (強)	9日遅	なし	破水後58m	すぐ (大)	なし	握	飲	3,820	〃
O	? (強)	11日遅	なし	臍帯巻路(頸部)	すぐ (大)	なし	握	飲	2,600	〃
P	5h (強)	10日早	早期の破水のため陣痛促進剤(薬)の投与	破水後15h	すぐ (大)	なし	握	飲	3,120	〃
Q	7h (強)	2日早	なし	破水後30m 羊水は淡黄色	すぐ (大)	なし	握	飲	3,260	〃
R	3h (強)	10日早	なし	同時破水	すぐ (大)	なし	握	飲	3,300	△△助産院
S	11h (強)	4日遅	なし	破水後1h	すぐ (大)	なし	?	のませない	3,370	××病院

※病院等の名前は略した

(別表・2-1)

名前 (性別)	生 年 月 日 (入所年月日)	出産時の 母の年 令	兄弟との 年令 差	父 母 の 職 業		母 胎 (体) の 状 況									その他の異常、特記事項
				父	母	いつまで仕 事をしたか	いつまで車 の運転をし たか	妊娠前の 健康状態	甘いもの	血 圧	尿蛋白	貧 血	つ わ り		
E (男)	'80.8.13 ('81.9.1)	39	—	会 社 員			10か月まで	良 好	普 通	高 い	あ り	な し			結婚後15年目の出産。帝王切開のため10か月目に腹部にX線。中毒症あり
T (女)	'80.6.18 ('82.4.6)		兄・5	自 営 業	同 左	9か月まで	9か月まで		好 き	正 常	な し	な し			長期避妊。心理的ストレス(祖父母が新築のため家事と仕事で多忙)
U (女)	'80.1.1.6 (")		— 一卵性双生児	教 員 (群馬・高校)	保 母	2か月後半 まで	6か月まで	良 好	普 通	正 常	な し		4か月位まで特にひどく、8歳ほどやせる。		切迫流産(2か月後半)。ホルモン注射とビタミン(E)剤(2〜3か月)増血剤と注射(7〜8か月まで)。出血(2か月ごろ、2日間少量)
V (女)	'80.1.1.6 (")														
W (男)	'80.1.1.14 (")		姉・3	会 社 員 (同族会社)	保 母 (熊谷公立産休代)	7か月まで	10か月まで	良 好		正 常	あ り	あ り	3〜6か月：食べたものをはく。さつまいも、水っぽいもの、佃煮、つけものを好む。		浮腫(むくみ)8か月後半
X (女)	'80.1.2.7 (")		兄 姉	自 営 業 (縫製業)	同 左	前日まで	9か月まで	貧血症	好 き	正 常	な し	な し	4か月まで食べられない。6か月まで空腹時、気持ちわるい。10歳やせる。		長期避妊。
Y (男)	'81.3.17 (")		兄・4 兄・2	造 園 業	縫 (自 製 宅)	9か月まで	当日まで			正 常	な し	な し	3か月ごろ少しあり。		中毒症(9か月ごろむくみが少し)。さかこ(8か月ごろ。体換で直す)。妊娠中に夫が1か月半入院。ストレスあり
a (男)	'80.5.10 ('83.4.6)	26	姉・3	自 営 業 (洋服店)	同 左	8か月まで	—	流産1回	普 通	正 常	な し	な し	食事はよくたべられた		胎児の心臓動が規則的でない
b (女)	'80.6.18 (")	29	—	保 育 者	大 宇 宙 研 (技術計算)	8か月まで	—	良 好	やや好き	正 常	な し	あ り (9M)	2M、食欲なし、においをかぐと気分が悪い		9M後半：増血剤
c (男)	'80.6.26 (")	28	姉・2 2卵性双生児	大 工	内 (縫 製 職 製)	2か月まで	—	良 好	普 通		あ り		つわりがひどいので、2か月目に内職をやめる。		中毒症あり。10M：腹部X線(胎児の状態をみるため)。
d (男)	'80.6.26 (")														
e (女)	'80.7.10 (")	22	—	農 協	保 母	9か月まで	1週間前まで	良 好	きらい	正 常	± (少し)	あ り (3M)	牛乳・生物がだめ		増血剤を朝・夕、同注射を2週間に1度(3M〜)かぜ薬
f (女)	'80.1.1.4 (")	35	—	農 業	同 左	5か月まで	—	流産1回 (77年)	きらい		な し	な し	ほとんどない		2年以上の避妊。9M、出血、さかこ
g (男)	'80.1.1.1 (")	30	—	保 育 者	同 左	8か月まで	前々日まで (たまに)	良 好	好 き	正 常	± (少し)	あ り (6M〜)	〜4M、さっぱりしたものを好む		切迫流産のため2〜5M休み。増血剤と同注射を6M〜。減塩食を医師からすすめられる。
h (女)	'80.8.12 (")	27	兄・2	農 業	同 左	9か月まで	9か月まで	良 好	きらい		な し	あ り (前期)	2、3M少し (食事は普通)		前期：増血剤

(別表・2-2)

名前	出 産 時 間				母 子 の 状 況				入 所 前 の 状 況			
	陣痛時間 (と強さ)	在胎期間 (予定日と 比べ)	出産のための 特別な処置	子どもの(特別な)状態 (破水後何分で出産)	産 声	出産後の 特別なそち	手指の にきり	初 乳	出産場所	体 重		
E	—	7日早	局所麻酔 帝王切開		すぐ 大	なし	?	飲	□□病院※	3,200	母親がみていた。他の子どもとの遊びは殆どなし。15年目の産 で育児が不安だった。	
T	4h 弱	3日早	抱乳(陣痛促進 剤)2粒 無痛分娩の注射		すぐ 大	なし	握る	飲	〃	3,520	母親がみていたが、祖母がおんぶされていることが多かった。使用 人も含め大人が多数おり、甘やかされて育つ。アトピー性湿疹しん。	
U	3h 強	56日早	なし	破水後9h、血色素が 上昇すぎ、やや赤みぎ、 血漿を少しぬきとる。	すぐ 大	保育器38日間	?	飲	〃	1,640	母親がみていた。「さくら」に4か月で入所。妹のV児と自宅で遊 ぶ方がV児のためによい、との両親の判断で9か月の時に退所。	
V	〃	〃	〃 (さかこ)	破水と同時に。 チアノーゼ 原死状態	5分後 ?	保育器32日間 (気管内挿管人 工呼吸、肺炎 のため生体物死)	?	飲	〃	1,840	4か月で「さくら」に入所。すぐに突発性発疹、気管支ぜんそく。 7か月から高熱を出し、〇〇病院で検査の際の「顔ら」(母の話) で髄膜炎になり死別。46日間入院。	
W	38h 一時強く、 後に弱い	7日早	陣痛促進の注射、 吸引分娩	破水後40分	すぐ 大	なし	握る	飲	〃	3,290	母親がみていた。親戚的にうすき・手足はし、外へ遊ばせる(自然 がいっぱいの所)。2か月：気管支炎。12か月ころ：消化不良で 入院。	
X	5h 強	3日遅	なし	〃	すぐ 大	なし	握る	飲	〃	3,004	母親がみていた。 5～6か月に歩行器を使用していた。	
Y	3h	満 期	陣痛促進の注射、 点滴をして分娩	野郎頭部一巻	すぐ 大	保育器5日間 (羊水をのみ ミルクをのみ 患くはく)	握る	のませない	〃	2,620	母親がみていた。6か月：突発性発疹。 入所まで外であそびはせなかった。	
a	6h 弱	2日遅	陣痛促進の注射	破水後1h	すぐ 大	なし	握る	飲	〃	3,300	祖父母が工場(××洋裁)で交替にみていた。	
b	7h 強	3日遅	なし	破水後4～5h	すぐ 大	なし	握る	飲	〃	3,410	2～5か月：神奈川県無認可保育所(「ひまわり」)：歩行器使用 6か月～2才9か月：市財大崎場「私立認可保育所(「柿尾」)：TVみでの保育 2才10～11か月：私立認可保育所(「柿尾」)：TVみでの保育	
c	なし	13日遅	陣痛促進の注射	破水後30分	すぐ 大	保育器3日間 2800円になる まで入院(6日)	?	飲	〃	2,400	母親がみていた。「三日ばしか」・突発性発疹。	
d				破水後30分、さかこ	すぐ 大	保育器3日間 2800円になる まで入院(10日)	?	飲	〃	2,450	同 上。	
e	36h 強	6週早 (34週)	なし	破水後40分	すぐ 大	なし	握る (8日目)	飲 (8日)	〃	3,300	祖母がみていた。ヒールス性湿疹。	
f	6h 弱い	6週早 (34週)	出血あり、止める ため点滴。その 後腹筋あり出産 全 身麻痺。帝王切 開。陣痛促進の 注射。	さかこ 仮死(アブガー7点)	小	保育器10日間	?	飲 (しぼって)	〃	2,360	母親(と祖母)がみていた。発熱しやすかった。 肺炎(110か月)、おたふくかぜ(2才1か月)、手足口病(1才 11か月)。	
g	4h 強い	11日早		早期破水、胎盤早期は く離で出血→帝王切開	すぐ 大	15日目退院	初め開き、 産後2日目 ににきり	飲 (2日目)	〃	3,600	産休あけて「さくら」へ。その後4か月から「たけのこ」へ。	
h	4h 強(注射の ため)	10日遅	陣痛促進の注射 局所麻酔	破水後30分	すぐ 大	保育器1日間 (黄たん.)	?	飲	〃	4,100	母親がみていた。 6か月：突発性発疹。1才4か月：手足口病。	

※病院名は略した。

(別表・2-3)

名前	入所当初の様子	「移動能力」を得ていく過程					離乳食他					その他	
		首のすわり	寝がえり	「ハイハイ」	おすわり	つかまり立ち つたい歩き	直立歩行	母乳の期間	内容	開始時	吸引力 しゃく力		その他
E	顔、青白く、皮膚の張りが無い。体は大きい、周囲の子どもと全く遊べず、手あたりしだいに倒してしまう。離乳食(後期食)を与えても、しゃく力がないのでいつまでも口の中に残っている。9月いっぱい「0才児」にいて、10月に「1才児」へ。			しない				8Mまで	ベビーフード使用		特に弱	1才で入所 固形物は全くだめ	
T	うす着であそぶ。指しゃぶりをよくする。皮膚の張りあり。白色。泣き声は大きい。甘ったれた感じでしゃべるため、言葉がはつきり聞きとれない。甘いお菓子をよくもってくる。男性をいやがる。	2M (か月)	6M	9M「四つ足ハイ」		9M 12M	12M		果汁 大人のものつぶし	9M	「ムラ」があり	入所初め チョコ、あめをもってくる	
U	表情が固く、キーキー声で泣いては、だっこを求める。V児とともに4月中は「慣らし」的にお昼ごはんまで。少しなれると水・砂遊びをやり始めるが、その夕方から発熱のため数日間休む、ということもくりかえす。5月中旬より体も強くなり出す。	3M	5M	7M				1Mまで 1~5M混合	果汁	3M			
V	表情が固い。体の動きがにぶく固い。よくキーキー声で泣く。すぐだっこを求める。4月中は「慣らし」的にお昼ごはんまで。それでもすぐに発熱し、数日間つづき休む。リズム遊びは大好きで少しなれるとすぐにやる。手足弱く「築山」に登れない。	3M	5M	しない(8~9M、骨膜炎で46日間入院)				〃	〃	〃			
W	湿疹体質で、首のまわり・胸をかゆがり、いつも赤くただれていた。よだれがいつも出ている。ニコニコ顔が多いが、泣きわめくこともある。言葉はつきりしない。食欲はあるが、強く偏食で生野菜・牛乳をいやがる。外あそびが大好き。	3M	6M	7M「腹バイ」足指つかう 9M「高バイ」	7M	8M 9M (片手)	10M 11M	6Mまで 7Mから混合	つぶし 果汁	3M	よく食べた	野菜きらい	
X	色白で皮膚のしまりが弱い。無表情でトロンとした目。歩行はするがすぐにつんのめる。素足を極端にいやがり大泣きをする。両手を胸のあたりに上げ、手足をフラフラさせて他の部屋を歩き回り、全く集団に入ろうとしない。言葉は「ワンワン」のみ。	2M半	5M	10M少ししたがすぐ立つ (5~8M・歩行器使用)		8M 8M	10M (歩く感じ) 12M	12Mまで	みそ汁の上ずみ	5M	強		
Y	色黒で、一見すると筋肉はしまっている感じ。笑顔が少なく、体もかたい。汚れとくによくいやがり、水・砂あそびは全くしない。歩行できず「四つ足ハイ」で移動。言葉は「アター」と呼びかけてくる。室内のスベリ台から動かない。	2M半	4M	7M「腹バイ」 9M「高バイ」	6M	7M 10M	14M 15M	のまない				肉類たべず・ 野菜類よくたべる	
a	厚着。体は大きい。顔色は青白い。意図時、リュックを背おい、大声で泣きわめき、昼食時まで泣き続いた。	2M	6M	6~8M「四つ足ハイ」 (歩行器使用)	6~8M	1才	1才2M	1週間 (初乳のみ)	果汁	3M	何でもよくたべる	1才8Mまで ミルクを哺乳ビンで	
b	血色がよい。筋肉・皮膚のしまりがある。衣服などに水がかかると大泣きする。手足にハエがとまると、「何か イターグ」と大泣き。素足を極端にいやがる。他の子に体をさわられても大泣きだった。	2M	6M	8M(右手でついで右足親指つけて進む。左手はひじをついて進む。左手親指はつかない)	11~12M	1才1M	1才2M (しっかり)	5、6Mまで 2M~混合	みそ汁の上ずみ	5M		よくのみよくねる。ミルク8~9Mまで	「柿尾保育園」(2階で、0~2才・2階)は外遊びを全然せず、机にむかい課題をする生活で、おちこんだ(母親の話)
c	青白い顔色。筋肉・皮膚のしまりがない。初めから全く泣かないで、ニコニコしていた。時々、「奇声」をあげてとび出した(「障害」をもっているのではないかと心配した)。言葉かけをしても適切な応答がなかった。	5M		1才すぎ「四つ足ハイ」 (奥の部屋のベッドで7~8Mまでねかせていた)		10M (歩行器)	1才6M (1、2歩)	1~2M (混合)	麦茶	6M	哺乳弱	入院中(1M)ミルクのみ、牛乳300cc、1hかけてのむ	
d	色黒で、皮膚のしまり弱い。表情とほしかった。言葉を発することも少なかった。視線を合わせないことが多かったが、合わせる場合には、眼で応答する感じだった。	4M		9M (歩行器使用)		1才2M	1才2M	〃 (〃)	麦茶	6Mすぎ	ミルクをよくはく		
e	血色よくて、筋肉のしまりあった。健康的な感じ。身の回りのことはきちんと自分でする。よくしゃべって、しっかりした感じ。大人の手をつなぎたがる。男性をいやがる。		6M	6~8M「四つ足ハイ」 「高バイ」			10M (2、3歩)	1才まで	果汁野菜スープ	2Mすぎ 4M	哺乳強	ミルクいやがる。8M~母乳と牛乳	
f	顔色、青く、体がかたい。無口で声を殆んど出さなかった。目でじっとと睨てくる感じ。他の子どもと遊べない。くつをはきたがる。衣服の着脱などのことは殆んど一人でやれた。	3M	5M (26日)	いざうような「ハイハイ」	7M	9M	1才3M	1Mまで	果汁	5M		1才2Mまでミルク	
g	健康そのものという感じで、表情が豊かでよくしゃべり、他の子どもを圧倒した(入所後2日間は泣きしたが、なれると以前から在園していた子どもとすぐ遊べた)。激しいけんかをよくした(進められまわらない感で)。	3M	5M	7M「腹バイ」(手指は開くが、足指つかわぬい) 9M「四つ足」10M「高バイ」	9M	8M 9M	1才3M	8Mまで	果汁	3~4M	しゃく力あり	便ゆるかった。	早期破水、早期はくりだったが軽いため陣痛促進の注射をうつ。産道開かず、しだいに出血多くなったため帝王切開
h	血色よい顔色だった。しかも顔でよく泣いた。食欲はあり、自分のお皿にのっているものを全部たべると、すばやく他の子どもの皿のものを食べた。手足はか細く、歩き方がぎこちない。男性をいやがる。	2M		6M「腹バイ」 「四つ足ハイ」		8M	10M	3Mまで (混合)				ミルク1M~1才2M	

(別表・3) '81年度さくらんぼ
保育園0歳児クラス
所属児童(18名)
の入所時の生後日
(週)数(個人別)

名前	何日目	何週後
A	5 1	7
B	4 8	6
C	7 6	1 0
D	5 7	8
F	1 0 9	1 5
G	1 3 8	1 9
H	1 3 8	1 9
I	5 6	8
J	7 1	1 0
K	7 5	1 0
L	6 8	9
M	6 6	9
N	1 2 5	1 7
O	1 4 9	2 1
P	6 1	8
Q	5 1	7
R	8 6	1 2
S	5 2	7

(別表・4) 同生後週(月)数別の人数

何か月目	2	3	4	5	6
何 週 後	6 - 8	9 - 12	13 - 16	17 - 20	21 -
人 数	7	6	1	3	1

- (1) 一人ひとりについて生後何日目(何週後)に入所しているか、をひろい出してみた(別表3)。

最も早い入所は生後48日目(B児)、遅いのは149日目(O児)である。それを別表4のよう
に整理してみると、いわゆる産休あけ児童(生後43日目)[※]に準ずる生後6～8週後の子ども
が全体の $\frac{1}{3}$ をこえ、 $\frac{2}{3}$ が生後3か月に満たない時期に入所していることが目立つ。個々の母親
の職場などにおける労働条件、保育所保育への希望の有無、および保育所側の受け入れ条件など
の関係で一概にはいえないが、この年度に関するかぎり全員が乳児期前半に入所している。

※ 労働基準法65条では、「6週間以内に出産予定の女子が休業を請求した場合には、就業
させてはならない。産後6週間を経過しない女子は、原則として就業させてはならない」と
いう産前・産後の各6週間計12週間(84日間)の休業を規定しているので、現在のところ
いわゆる産休あけ児童は最も早い場合で生後43日目になる。ちなみに社会福祉法人さくら
会ではさらに2週間計産後8週間を有給で保障している。

なお入所が比較的遅い子どもたちについては、次のような事情があった。N児の場合は、母
親が勤める「すみれ」(深谷市内の私立保育所。「さくらんぼ」とほぼ同様の保育を行なってい
る「姉妹園」⁽⁹⁾のひとつ)に生後57日目に入所しており、「さくらんぼ」の受け入れ条件が整
うのを待っていた。O児は母親の事情により入所が遅れたケース。F児及びG・H児については
後述するが、出産後の母体の回復状況や双子であること等が関係した。

- (2) 父母の職業欄をみると、母親が保育所勤務の保育者(保母)であることが17名中12名と目

立つ。しかもL・M児の母も結婚前は保育者であったし（M児の母は出産後に復職した）、I児の母は障害児収容施設で保母職として勤めていることを合わせると、保育者以外の職業についているのは3名だけである（D児の母は出産後に勤め始めた）。この傾向は'81年度にいわば偶然的に現われたともいえるもので、例えば同年度の「さくら」の入所児について同様のことをみると、保母は16名中2名のみであった。ただしここでは転園などで「さくらんぼ」と重複するケース※は除いて考えている。他方社会福祉法人さくら会に勤める保育者・職員数が100名をこえ、その多くが現在および今後も妊娠・出産の条件（可能性）をもっていること、深谷市とその隣接市町村に「姉妹園」が幾つもでき、そこへ通う深谷市在住の保育者も増えていること、これらの殆どが結婚・妊娠・出産後も保育者として働き続けたいという意志を持っていること、を考えれば、今後も保育者を母親にもつ子どもが0歳児クラスにおいて一定の割合をしめていくであろう。

※ 社会福祉法人さくら会の3保育所勤務の保育者（保母）は出産休暇終了後、授乳の関係で（どの母親もできる限り長く、つまり最短で生後3か月まで、できれば生後6～8ないし10か月ぐらいまで、母乳で我が子を育てようと努めていたため、保母にも日中の授乳が保障できるように）自分の所属する保育所に子どもをあずけており、日中の授乳が終了すると他の保育所に転園させることにしている。'81年度の場合、「さくら」から「さくらんぼ」への転園がA・M児、逆の転園がF・K・L児のケースであった。なお「第2さくら」は'84年度までは0歳児クラスがない。

父親の職業はさまざまであるが、I・S児の父を除いて、日中の比較的に規則的な勤務が多い（D児の父は以前勤務時間の長く不規則な職場にいたが、長女〔D児の姉〕から「おじちゃん」と呼ばれたことをひとつの契機に転職したとのこと）。先の2名のうち、特にI児の場合は両親ともに障害児収容施設勤務ということで夜勤も含む、変則的な職場のため、保育所保育の時間帯（午前8時～午後4時の前後に延長〔時間外〕保育を行ない、最長で午前7時半～午後6時）だけでは不足のため、満1歳以降は保育者や他の子どもの家庭であずかることがしばしばあった。

(3) 妊娠中の母胎（体）の状況では、「異常・特記事項」に何も記入していないのは一人もいない（何をその項目の中を含めるか、という点は勉強・検討・改善しなければならないが）。この点が前述の保母の割合の高さ（保育労働のきびしさ）と何らかの関係をもっているか否かは今後もう少し事例を多くとり、かつ個々のケースの内容に立ちいって検討されねばならないであろう。⁽¹⁰⁾ ちなみに先の「さくら」16名のうち上記項目に記入なしは4名である。

個々の項目の中では、今までに流産の経験ありが2名、今回切迫流産の危険のあった者が5名、つわりのひどかったのが4～5名、軽いと答えたのも含めて貧血ありが13名、そのうち増血剤を利用した者が8名、（土）を含めて尿蛋白の出た者が13名、腹部X線照射を受けたのが4名、

陣痛時間の長いのが5名、等が目をひく。特にG・H児、I児、N児などの母胎(体)に幾つものハイリスク因子が重なっている。くりかえすが、文字どおりまったく正常な母胎(体)は(F児の場合も含めれば)なかったと言ってよいだろう。

ひとつの参考として別表2-1をみてみても、13名の母親全員が「異常・特記事項」欄に記入しており、その内容も前記18名と同じようにきびしいものとなっている。すなわち、流産経験2名、切迫流産の危険あり2名、妊娠中毒症4名、貧血5名、腹部X線照射2名、ひどい精神的ストレス2名、大幅な体重減少2名等である。

- (4) 次に出産(時)を含む周産期についてみてみよう。出産(分娩)時の処置等では、帝王切開が2件3名、前・早期破水が2名、微弱陣痛が8名おり、薬および注射で陣痛促進剤を4名が受けている(陣痛促進剤についてはある曜日やある時間帯に出産時間を合わせるためにつかわれるなどの、いわば医師の側の濫用とも推測されるケースもある)。在胎期間にはほぼ問題なく、全員が正期産児(妊娠39～42週の分娩で出産)であったが、それと生下時体重との関係をみると、SFD(Small for date baby)⁽¹¹⁾が4名(H・G・J・O児)おり、逆にLFD(Large for date baby)が1名(F児)であった。

出産後の子ども(赤ちゃん)の状態では、異常として、チアノーゼ3名、頸部あるいは頭部の臍帯巻絡4名、浮腫1名、羊水混濁1名、羊水感染症1名、黄疸1名、嘔吐1名等がみられるが、とりわけG・H・I・J児らにそれらが重なっている。このうちI児を除く3者は保育器に入っている。

また先ほどのように参考までに別表2-2をみると、15名のうち早期産児(妊娠20～38週の分娩で出生)が3名、SFDが3名おり、また保育器に入った者が8名と半数をこえているのが眼をひく。特にU・Vの一卵性双生児、c・dの二卵性双生児、f児、g児らに幾つもの異常がみられる。

事柄の一面的な強調はさげなければならないし、いたずらに無用な不安を煽るのは慎みたいが、以上の記述にその一例をみたような厳しい条件を背負っている0歳児の育児とその責任をひとり(母)親、もしくは家族などにのみ負わせる主張が、その妥当性を疑われるのもやむをえないのではなかろうか。またその反面、保育所・保育者らの責任も問われている。すなわち、例えば、上記に例示したような子どもたち一人ひとりの誕生までの条件〔母胎内環境〕や出産時のハンディの具体的内容を保育者集団が頭の中にきざみつけているかどうか、また自分たちの保育内容がこれらのハンディの重みに負けないものであるかどうかの吟味が求められている。※

※ この点と関係する各専門機関・専門家(特に医療・心理・福祉等の)と保育所との結びつきについては割愛するが、「さくら・さくらんぼ」では、従来までの各関係者とのつながりに加え、'82年度より小児神経内科の林別医師を定期的に(月1回)招き、0歳児の障害

・異常・弱さなどの早期診断・早期発見にあたってもらふ乳児健診的活動にとりくんでいることのみを記す。

〈2〉 乳児期後半における「移動能力」の獲得と感情・認識の発達 — 3名の0歳児の入所後の発達経過 —

ここでは、表1の18名のなかからF・G・H児の3名のケースをとり出し、入所後1年間の彼らの変化・成長・発達の経過の一端を、月齢ごとに、4つの柱⁽¹³⁾に仮分した一覧表に整理し直してみた(表2～4)。

この3名をここでとりあげたのは次の理由からである。④前述のようにG・H児は一卵性双生児であり、かつその影響もあり胎生期・新生児期に幾つかのハイリスク因子をもつSFDであったこと。⑤逆にLFDであったG児はその点と陣痛促進剤の使用、4年間の長期避妊を除いて目立った異常がみられないこと(この前2者もハイリスク因子ではあるが)。⑥筆者が彼ら3名の主たる担任保育者となり、約1年間にわたってその保育にあたったこと(G・H児にたいしてはその後の2年間もほぼそうであった)。

(1) 表2～4の内容に立ち入る前に、これらの表の作成手順などについて述べたい。

0歳児(乳児)の場合、すでにみたように一人ひとりの胎生期・新生時期そして入所までの経過が異なることもあり、一定の共通性を含んではいるが各々が独自のいわば生理的リズムに近い生活リズムをもっている。特に乳児期前半の場合はそうである。そのため、平日において24時間のうち日中の8～10時間をしめる保育所保育を、子ども(赤ちゃん)たち一人ひとりのちがいの部分にできるだけ対応できるものとするためには、睡眠・食事・健康状態を初めとする各家庭での子どもの状況、彼をとりまく家族や物的環境などについて保育者がある程度知っておかなければならない。また生後間もないわが子をあずける親の側も、保育所での子どもの様子を少しでも知りたいと思うのは、いわば当然の気持ちであろう。

そこで「さくらんぼ」では別表5のような日課表をつくり、朝子どもを送ってきた時を利用して上段の部分を(母)親に記入してもらう。一定の記号などを使い、日中の保育の流れ(食事・授乳、午睡、排便、もしあれば発熱等の健康状態)を中段部分に、その日に目立った(気づいた)子どもの変化・発達を下段部分に、保育者が書き入れる。

「さくらんぼ」では、それぞれの子どもたちのその時々の様子・状態に応じつつも、月齢に近い子どもたち2～4名ごとに1名の特定の保育者が主たる担任になり、比較的長い間にわたり同一の保育者が同一の子どもたちの「グループ」の保育にあたるよう努めている。こうして、主として特定の小人数の子どもに一定の責任を負いつつ、クラス全体の子どもをみていくことにより、一人ひとりのちがいにできる限り眼がいくように留意している。そのため日課表の記録も(特に下段部分は)多くの場合主たる担任が行なうが、それを他の保育者らも補なったり、またその記

(表・2-1) F児の入所後1年間の変化・発達の記録

月齢	「移動能力」	手・足・指	音声・言葉・認識／感情・意欲／遊び・交流	健康・食事／その他
3	81年 3/3 腹臥位で約1分間首をもち上げる。 3/6 保育者のひざの上でつんつんする。 3/10 背臥位で足のけりにより頭方向へ移動。	3/2 背臥位で天井からのつりおもちゃに手をのばす。	3/2 保育者の話しかけに視線を合わせてこにこする。あやと大きな声を出して笑う。表情が豊か。	3/2 体重(7.25kg) 3/10 離乳食の準備として、じゃがいも・みそ汁を一さじから始める。保育所での睡眠時間は1日3回、1回20～30分。
4	3/14 腹臥位で約6分間。 4/11 ふとんと床との差を利用して寝がえり。		3/14 左記事項の際、保育者・他の子どもの動きを目で追っている。	3/14 (7.4kg) 3.23 (7.65kg) 4/8 (7.2kg) 3/20 緑便のため離乳食は中止。 4/11 再開。 4/12 下・左右の中切歯
5	4/16 腹臥位で回旋(ふとんの上で)。 4/28 芝生で腹臥位にさせると、両手掌支位で回りを見たり、時々片肘支位で草をとり口へ運ぶ。 5/6 寝がえり。腹臥位で180度の回旋。 5/7 腹臥位から背臥位になる。	4/16 左記事項の際、足指のけりがある。		4/15 (7.95kg) 4/22 (8.15kg) 4/28 (々) 5/8 (8.4kg)
6	5/14 腹臥位で両手掌支位により、胸部及び腹部(一部)がもち上がる。 5/18 腹臥位で後退。寝がえりの連続により移動して、眠っている赤ちゃんの目・鼻・口へ手を出す。 5/25 腹臥位で両手・足を交互にまげ・のばし、「両生類ハイ」のようにして前進(数10cm)。 5/30 腹臥位で高さ30～40cmの積み木箱に片手をかけ、中をのぞきこもうとする。 6/1 腹臥位で両手・足をのばして飛行機のようなことうをする(腹部のみで支位)。 6/2 「両生類ハイ」で6歩進む。	5/18 腹臥位でおもちゃを持ちかえる。 6/11 芝生にいぐさをしき、その上で腹臥位にすると、土や芝生を手指(第2～5指)でしきりにつかもうとする。	5/27 にわたりの鳴き声にキャッキョッと(つんつんして)喜ぶ。 6/8 最近いろいろなものに積極的に近づいていく。要求も大きな声で示す。	5/13 (8.3kg) 5/20 (8.6kg) 6/3 (9.0kg) 6/10 (9.0kg)
7	6/18 「腹バイ」の際、右足の屈伸はあるが、左足は比較的伸ばしたままのことが多い。 両手掌と両足指で支位(手掌支位)し、腹部をうかす。 6/24 片手におもちゃを持って「腹バイ」で室内を横断。 6/30 椅子座位での食事に移る。 7/1 スベリ台(神寶製作の小さいもの)の階段を登り、そのまま(頭を先に)斜面をすべりおろす。	6/18 左記事項の際、両足指のけりがある。 6/30 たらいの水の中に足を入れると、足指が手指のように5本とも開く。	6/26 大きなボール(内径1mほど。赤色。脳性マヒ児の訓練用のもの)を見ると泣き出すが、時々ぞいてもいる。 6/30 椅子座位での食事になったら、保育者がスプーンで食べさせようとしても口をあかず自分の手で握ったものを口へ運ぶ。 7/3 食事時にしく赤いシートを見ると、A～Dの4名とともに集まってくる。 7/9 上記の4名と同じように水遊びをする(たらいをめざしてまっすぐに進んでくる)。大きなボールを見ても恐がらない。	6/15 2回食(午前・午後食)を始める。 6/29 離乳食・後期食に入っている。食欲大いにあり。 7/1 ビジョン製の乳首(X印)で180ccのミルクを数分で飲む。 7/7 (9.55kg)

月齢	「移動能力」	手・足・指	音声・言葉・認識／感情・意欲／遊び・交流	健康・食事／その他
10			てあげると大喜び。再び自分でやるがやはりうまくいかない。 大人が食事しているのを指さし「マンマー」テーブルに登るために箱椅子を引き出し、そこに足をかけて登る。	
11	10／21つかまり立ちからの「一人立ち」で、右足を軸に左足を一步出す。 11／4 数歩あるく。		10／29 大便の後おしりをふいてあげると、「イタイッー、イタイッー」らしき言葉。 11／2 保育者がはえをたたいているのを見て、手でテーブルの上のはえをたたこうとする。 11／4 ひつじをしだいに好きになる。さわらせても平気。	10／24 (10.2kg) 11／7 (10.5kg)
12	11／18 完全なく(床からの)一人立ちから数歩あるく。 11／16 何度も立ち上がり、2～3m歩く。 11／25 歩きながら90度以上の方向転換。 11／30 歩いていて杯などをひろうためにしゃがみ、また立つ。360度の方向転換などたいていのことが可能。		11／6 自らひつじの方へ這って行って頭をなげる。 11／17 ワゴンを出すと、すぐに約10mほどの芝生を這ってきて、ワゴンにのせてほしいそぶりをする。 11／24 絵本の中の犬・牛を指さして「ワンワン」「モー」。 11／25 絵本の頁を次々にめくりたがる。 11／30 大人との間でボールを投げあって遊ぶ。 12／1 おもちゃのラッパを口にあてているので、保育者が「パーパー」と言うと、「パーパー」とまねる。 保育者がボールを投げ、「Fくんとてきて」と頼むと、歩いてひろってくる。 12／3 リッチ(大きなコリー犬)にたいして少し怖いようだが、近くによりたいようでもある。保育者の体に手をふれていれば安心している。 12／8 散歩に出る時に保育者が「出発」と言うと「パー！」とまねる。 12／10 公開保育でのリズム遊びに参加する。何才児クラスの順番でもとび出していき、「四つ足ハイハイ、～」「うきぎ」「汽車」等をする。 12／11 H児とソフォーを間にはさま、「イナイ・イナイ・パー」をしている。	11／14 (10.9kg)、11／21 (11.3kg) 11／28 (11.4kg) 11／18 上・左右の大歯、第1臼歯。 11／19 歯、上8本、下4本。 12／4 (11.5kg) 12／5 下痢・かせなどで年末まで体調が悪い。 12／8 下・右の大歯。下・左の第1臼歯。
13			12／15 絵本を見せながら「ワンワンはどこ？」と聞くと、指さす。おむかえの時、母親に抱っこを求めてぐずる。 12／28 F児より月令の低い子どもの頭をぶっている、保育者が「めー」とすると、まねをして鼻の所に指を持っていく。	12／14 (11.3kg) 12／24 (11.5kg) 1／6 (11.4kg) 12／16 哺乳びんをやめる。コップで上手に牛乳を飲み、眠る時に少しぐずるが、すぐに眠る。 下・左の大歯(下は計7本)。 12／19 下痢のためミルクにもどしたこともあり、

月齢	「移動能力」	手・足・指	音声・言葉・認識／感情・意欲／遊び・交流	健康・食事／その他
13			<p>82年 1/8 「Fくん、ちょうだい」(F、おもちゃをくれる)「ありがとう(と頭を下げる)」(Fも頭を下げる)。絵本の中のお皿をみて、手をのばし、食べるまねをする。</p> <p>1/9 木馬にのりおりして遊んでいる所に、J児がやってきたら、J児のおでこをたたき、木馬をよそへひっぱって行く。 P児の寝ているふとんをたたきながら「ポッポッポッ」とうたう。</p> <p>1/12 こまとひもを組み合わせて遊ぼうとする。</p>	<p>再び哺乳びんを使う。 1/6 再び哺乳びんをやめる。</p>
14			<p>1/13 歩行が安定してきた頃から、「第2さくら」のがちょうを恐らなくなる。</p> <p>1/16 保育者が「めー」としかるまねをすると、F児は保育者をぶらにくる。</p> <p>1/20 食事の用意時に、「おかけとタオルをあそこへ持って行って」と頼むと、運んでくれる。途中で落したものを後からひろいに来る。</p> <p>1/25 物をつまむまねをしながら、「マンマ、マンマ」と言って保育者の口へ入れてくれる。それを保育者が「もぐもぐ」と食べるまねをすると、喜ぶ。 おしっこでぬれたパンツを自分のよぐれもの入れのかごまで持っていく。</p> <p>1/26 食事の用意時に「Fくん、これをもって。よいしょ、こらしょ」と頼むと、箱椅子を持ち運ぶ。</p> <p>1/27 歌「たんぼっぼ〜」の部分がはっきりしてきた。</p> <p>1/28 散歩時に、保育者が空にうかんでいるたこを指さしながら教えると、F児も「アーアー」と言いながら指さす。</p> <p>1/29 積み木を5つつむ(5cm四角のもの)。</p>	<p>1/18(11.9kg) 1/29(12kg) 1/19 第2臼歯を除いた16本の歯がそろう。 1/27 はしかの予防接種。</p>
15				<p>2/16 夕方発熱(38°5′) 2/17 休む(中間から夜間にせきこむとのこと) 2/19~20 休む。 3/2 「さくら」へ転園。</p>

(表・3-1) G児の入所後1年間の変化・発達の記録

月齢	「移動能力」	手・足・指	音声・言葉・認識／感情・意欲／遊び・交流	健康・食事／その他
4				81年 4/6 体重(5.25kg)。ミルクを飲むとよく吐く。
5	4/23 腹臥位にしてみる。 4/27 寝がえり(右回り、ふとんの上)。 5/9 左右どちらにも寝がえり。 5/11 腹臥位で肘支位により首をもちあげる。	4/23 背臥位でおもちゃを左手にもち、ふったり、口に入れたりする。 5/11 哺乳びん(小)を両手で支え、少し飲める。	5/18 声を出してよく遊ぶ。 つりおもちゃで遊ぶ。	5/6(5.3kg)
6	5/30 腹臥位で片手(肘支位?)支位。 6/1 腹臥位で約30分間いてもいやがらない。 6/4 腹臥位で後退。 6/5 芝生での左肘支位の腹臥位で、右手をつかい草を引きぬいている。 6/17 リズム遊び「どんぐり」の左回りは苦手なように腕がぬけにくい。	5/21 食事時に左手をのぼしてスプーンをつかもうとする。 5/29 腹臥位で右手指は開き、左手指は握っている。 6/2 腹臥位で前方にあるおもちゃなどに手をのぼす。 6/4 左記事項の際、足指のけりがある。		5/21 スーク製の乳首では飲めず、ピジョン製(X印)では7~8分でおわるので、Sの穴で20~25分かけて飲む。 離乳食はつぶしたものの(じゃがいも・にんじん・卵黄・トマト・みそ汁)から始める。 6/8(5.55kg)、6/10(5.45kg) 6/18(5.95kg) 6/7 かぜで発熱。6/9まで休む。 6/10 吐いて白いものを出す。 6/15 2回食にする。
7	6/20 腹臥位で左右に回旋。 6/23 「腹バイ」で約2m前進。 6/24 スベリ台(小)の坂部分を這い上ろうとする。	6/20 左記事項の際、足指のけりがある。 6/23 人參を右手に握らせると、上手に口へ運ぶ。 6/30 食べるのが上手になり、自分で食べられる。 7/9 汁浴時に腹臥位にし手で胸を支えてあげると、両手をバシャバシャさせ、足をつんつんする。	6/30 母親をみてはにこにこすることが多くなる。 7/2 ミルクがいらなくなると左手ではねのける。 食事時に、保育者がスプーンで食べさせようとすると、自らの左手にもった人參をみつめ、そちらを口に入れる。	6/19 下・左右の中切歯 6/20~21 かぜ(下痢)のため休む。 6/25 小児神経内科医の診察をうけるが特に異常なし。 7/1(6.1kg)、7/7(5.95kg)、7/17(5.95kg) 7/13~16 発熱のため休む。
8	7/20 椅子座位での食事に移る。後ろへそりかえったり、左によりかかることが多い。 7/24 一人で自分から座る(両手を前について)。 7/29 椅子座位にしたいに慣れてきて、両手を肩の高さまで(W字形に)あげているのではなく、積極的に食べ物に手を出すことが多い。 8/11 座位で遊ぶことが多くなったためか、それ以前に比べ動きが少なくなったように思われる。 8/13 スベリ台(大)の斜面を「腹バイ」で登る。 8/14 スベリ台(小)の階段を登る。	左記事項の際、時おり食べ物に手をのぼす。	7/25 食事時に使用する赤いシートをしいていたら、方向をかえて這ってくる。 8/11 指人形の山羊をもってしきりと動かしているの、保育者が「めえー、めえー」と鳴き声をまねると、G児もすぐに「メエー」と模倣する。	7/21~22 発熱のため休む。 7/25(6.2kg) 7/30~8/6 発熱、その後家族旅行のため休む。 8/17 午後発熱(39°3') 8/18 休む(39°)

月齢	「移動能力」	手・足・指	音声・言葉・認識／感情・意欲／遊び・交流	健康・食事／その他
9	<p>8/20 一時に比べ「腹バイ」がやや少なくなったように思われるが、何か目標がある時の「腹バイ」のスピードは速くなった。</p> <p>8/25 「四つ足ハイ」を始める。</p> <p>8/28 つかまり立ちから座位へ。</p> <p>9/4 段差(約25cm)を登る。</p> <p>9/5 門からテラスまで(約10m)芝生を「四つ足ハイ」で進む。</p>	<p>8/20 椅子座位での食事時に手づかみでどんどん食べる。</p> <p>8/28 手指の握り開きをくりかえす。</p>	<p>9/1 喃語が少しずつ出始める。</p> <p>9/8 おまるで大便をする(つかまり立ちをし、りきんで)。</p>	<p>8/19(6.5kg)、8/26(6.55kg)、上・左右の中切歯、9/1(7.0kg)</p>
10	<p>10/7 「さくらんぼ」の築山を5、6歩登る。</p>	<p>10/13 「四つ足ハイ」の右足が180度回内する。芝生の傾斜面を登りおりする時と同じ。</p>	<p>9/25 リズム遊び「四つ足ハイ〜」「どんぐり」「かめ」を喜んでする。</p> <p>10/1 座位で両手を打ち合わせているので、保育者が「シャンシャンシャン」とリズムをとってあげると、喜んで続ける。</p> <p>10/2 パンツをおろしてあげる時に、自ら足をあげてくる。</p> <p>10/3 「パーパーパーパー」</p> <p>10/6 水遊びをしたくて水道へ這っていく。少し後に保育者が水道からG児をおろそうとすると、体を後ろにそらせいやがる。</p> <p>10/8 箱椅子の上に「四つ足ハイ」のかっこうでのり、その姿勢からテーブルへ手をのばし、保育者のおやつをとろうとする。</p> <p>10/13 砂場で遊んでいて、1才児クラスの子どもたちが水道で遊んでいるのを見て、水道へ這っていく。</p>	<p>9/26(7.45kg)、10/9(7.35kg)</p> <p>9/28 10か月健診(特に異常はないとのこと)</p>
11	<p>10/29 芝生の傾斜面をおりる時に、今までのように頭を先にしてではなく、足を先にして後ろ向きになりおりていく。</p> <p>11/4 「さくらんぼ」園庭のスベリ台(高さ約2m余)の斜面をくりかえしのぼり、すべりおりる。</p>			<p>10/24(7.4kg)、11/7(7.6kg)、ミルクをやめ牛乳にする。</p> <p>11/9~10、11/14~18 かぜのため休む。</p>
12			<p>12/17 「マンマー」などがよく出る。ボールを転がしてあげ、次に「こっちへちようだい」と言うとおしかえしてくる。</p> <p>12/18 歌「秋の空」をうたってあげると、「オーイ」と口に手をあてて呼ぶ。</p> <p>リズム遊び「四つ足ハイ〜」のリズムに合わせて「四つ足ハイ」をたくさんする。</p> <p>他の子どもが散歩に出かけようとする、G児も散歩に出たくて這ってくる(肺炎直後なので禁止されている)。</p> <p>肩車や「飛行機」(両手をもってぐるぐる回す)等をしとやってくる。</p>	<p>11/19下・左の第2門歯。午後発熱(38°6′)。</p> <p>11/20休む。</p> <p>11/29朝、発熱(39°)。この日以降、日中は平熱になるが、夜に発熱することをくりかえす。肺炎であることがわかり、12/16まで自宅で祖母がみる。</p> <p>12/17久しぶりの登園だが、食事時にどんどん這ってきて、手づかみでたべ、食欲をみせてくれる。</p> <p>歯：上8本(左右の中切・側切・犬・第1臼)</p> <p>下4本(左右の中切、左の側切、第1臼)。</p>

月齢	「移動能力」	手・足・指	音声・言葉・認識・感情・意欲・遊び・交流	健康・食事／その他
13			<p>12/21 手遊び（「かいぐり」「こっちのたんぼ」等）の模倣力が高い。</p> <p>12/22 手掌を相手にむけてバイバイをする。</p> <p>82年</p> <p>1/7 食事時に、他の子どもがみかんを食べているのを見て、みかんの皿をさして「ター」と言う。</p> <p>1/8 「まためがねー」と言うと、そのかっこうをする。 絵本の中の皿を見て、手をのぼし食べるかっこうをする。</p> <p>1/9 H児とともにテラスをこえ、芝生をおり、土で遊んでいる。</p> <p>1/11 N児にむかって指さしながら「アーチャン、アーチャン」と呼びかける。2人でむかい合い、さかんに声を出して遊ぶ。</p> <p>1/12 おもちゃのラッパを口にあて、「パッパッー」と言っている。</p> <p>1/13 このところ特に甘えがでてきて、抱っこを求める。</p>	<p>12/23 午後、発熱（39°以上）</p> <p>12/24～年末休む。</p> <p>1/7（8.1kg）、1/18（8.5kg）</p> <p>1/8 家では野菜をあまり食べないとのこと。しかし、午後食のほうれん草の卵とじはおかわりをする。</p>
14	<p>2/1 足元のみとんから手を離し、一人立ち。</p> <p>2/2 完全な一人立ち。</p> <p>2/4 左足を出し2歩。</p>		<p>1/22 積み木（5cm四角）を2個つむ。3個目ものせるが、うまくいかない。</p> <p>1/27 積み木を4個積む。</p> <p>1/28 散歩の途中でいろいろのものを指さして、ほしいことを示す。</p>	<p>1/29（8.35kg）、2/8（8.6kg）</p> <p>1/30 はしかの予防接種。</p> <p>2/13 哺乳びんをやめ、コップのみにする。</p> <p>2/15 午後、発熱（39°3'）→2/16休む→2/17午後、発熱（38°3'）</p>
15			<p>3/15 おやつ時に、手をさし出して「チョーダイ」とはっきり言う。</p> <p>3/19 絵本の中の犬・猫・ひよこの鳴き声をまねる。</p>	<p>2/18～19、2/22 休む。</p> <p>2/25 下・右の側切歯、第1臼歯、計7本。（8.4kg）。</p> <p>2/26 午後、発熱（38°5'）。</p> <p>3/1～3、8～10 かぜのため休む。</p>

(表・4-1) H児の入所後1年間の変化・発達の記録

月齢	「移動能力」	手・足・指	音声・言葉・認識／感情・意欲／遊び・交流	健康・食事／その他
4		81年 4/6 手足が細い。足でふとんをよくける。	4/6 笑顔が多いが、声は出ない。 おしめがぬれたり、空腹になっても泣かない。手しゃぶりをしている。	4/6 ミルクの飲みが弱い。よく吐く。 体重(5.05kg) 4/8 ミルクを150ccから180cc(1回)に増やす。 4/15(5.1kg)
5	4/20 背臥位でふとんからのり出す。 5/9 寝がえりをする(左回り)。 5/11 腹臥位→背臥位の寝がえりもできる(左手がうまく抜けない時もある)。			5/6(5.8kg)
6	6/1 腹臥位で180度の回旋。 6/4 腹臥位で約10分間。 6/12 両手掌支位で顔を前方にむけた腹臥位姿勢が安定してきた。 6/18 体を左右にゆらしながら、前方の哺乳びんをめがけて、腹臥位で前進(約10cm)。	5/24 腹臥位で右足指は着床しているが左足指はういている。 6/4 腹臥位で両手指は開いている。 6/10 食事時に時おりスプーンに手をのぼす。	5/25 風が木の葉をゆらすと体をすくめて喜ぶ。 6/4 歌をうたってあげると、キャッキャッと喜ぶ。 6/12 左記事項にともない笑顔がふえてきた。	5/25 スーク製の乳首(S)で25分かけて180ccのミルクを飲む。 下・左右の中切歯。 6/3(5.8kg)、6/10(5.9kg)、6/18(6.07kg) 5/12 つぶし(じゃがいも、にんじん、卵黄、トマト、みそ汁)から始める。 6/10 離乳食を口から出さずに、上手に食べる。 6/15 2回食にする。
7	6/19 腹臥位で後退。 7/2 (腹臥位での前進を家で確認)。 7/6 両膝と両手掌で支位(「四つ足ハイ」のように)して、体幹を前後(頭尾方向)にゆする。 7/9 左腕の肘先部分と右手・右足を使っての「腹バイ」(左足指は着床していない)。 7/17 室内を積極的に移動。 7/18 椅子座位での食事を始める。	7/2 左手に人参を持たせてあげると、右手をそえて、両手で口に入れる。 7/18 左記事項の際、左手は手指を閉じ、腕を曲げている。右手で食べ物をつかんだり、スプーンをもつ。	6/24 母親のお迎えをみてにこにこする(以前はあまり笑わなかったが)。 6/27 知らない人をじっと見るようになる。 7/8 「イナイイナイバー」に大きな声をあげて喜ぶ。 7/17 腹臥位で水遊び用のたらいをのぞきこんでいる。多少の水がかかっても泣かない。	6/25 小児神経内科医の診察結果：両手がかたいた。横へのパラシュート(反応)で左手の出すのがおそい。(1か月間様子をみる)。 左足第1指のけりが弱い(まず着床させること)。 「腹バイ」をたくさんすること。 6/26 スーク製の乳首(S)で約10分間で180ccのミルクを飲む。 7/1(6.15kg)、7/7(6.15kg)、桃半分大を歯でかみきり食べる。 7/17(6.0kg) 7/18~16 発熱のため休む。
8	7/23 スベリ台(小)の斜面を登ろうとする。スベリ台(大)の傾斜面にもいどむ。 7/24 スベリ台(小)の階段を2段まで登る。 8/11 しきりとつかまり立ちをする。以前に比べ動きが少なくなったように思われる。座位で遊ぶ。 8/14 スベリ台(小)の階段を登り、上で向きをかえ足を先にして斜面をすべりおりる。次に斜面も登りきる。	7/24 椅子座位での食事時に手をのぼして食べようとするが、まだうまく口へ運べない。	7/25 D児と顔をみあわせて笑っている。	7/22 発熱のため休む。 7/24 皿に口をつけてみそ汁を飲む(皿は保育者が支えている)。 7/28~8/6 発熱、その後家族旅行のため休む。

月齢	「移動能力」	手・足・指	音声・言葉・認識／感情・意欲／遊び・交流	健康・食事／その他
9	<p>8/19 「バイフライハイ」になる。</p> <p>8/20 以前に比べ「腹バイ」の量はやや少なくなったが、おもちゃ等の目標がある時のスピードはかなり速くなったように思われる。</p> <p>8/24 「バタフライハイ」と「両生類ハイ」との組み合わせの「腹バイ」をする。</p> <p>8/27 段差（約25cm）を登る。</p> <p>8/31 芝生の傾斜面を「四つ足ハイ」で登る。</p> <p>9/3 つかまり立ちが安定してきた。</p> <p>9/5 門からテラスまで（約10m余）の芝生を「四つ足ハイ」で進む。</p>	<p>8/19 左事項の際、足第1指のけりはない。</p> <p>8/20 椅子座位での食事時に手づかみでどんどん食べる。</p> <p>8/24 左記事項の際、両足首より先は回外しているため両足第1指のけりはない。</p>	<p>8/24 おまるで小便をする。</p> <p>8/28 母親に「バイバイ」（？）と言いながら手指を握り開く。</p> <p>9/2 喃語がふえてきた。</p> <p>9/4 保育者があひるをさして「ガーガーさんだよ」と言ったら、H児も「ガーガー」（？）と言う。</p> <p>9/11 おまるで大便をする。</p> <p>9/17 F児をたたく（いつもは泣かされているが）「マンマ」と言いながら、保育者の食べている物を欲しがる。</p>	<p>8/19（6.55kg）、8/26（6.5kg）、9/2（6.9kg）</p> <p>8/26 上・左右の中・側切歯。</p>
10	<p>10/2 「高足ハイ」で芝生の傾斜面を少し登る。</p>		<p>9/24 手遊び「こっちのたんぼたんぼ」のまねをする。</p> <p>9/25 リズム遊び「四つ足ハイ～」「どんぐり」「かめ」を喜んでいる。指さしをする。</p> <p>10/2 「バーバー」「アジャー」。しきりとG児を「いじめる」。</p> <p>10/3 G児を指さして「～チャン」。</p> <p>10/5 保育者が「イナイイナイバー」と言葉をかけてあげると、それにあわせてふと顔を向けたり、またのぞかせたりする。そのうちにH児自ら「イナイイナイバー」（？）と言いつつ、同じことをくりかえす。</p> <p>10/5 「オイ！」と言って保育者を呼ぶ。</p> <p>10/6 水遊びをしたくて水道へ這っていく。少しして保育者が水道からH児をおろそうとすると、体を後ろにそらせていやがる。</p> <p>10/13 水道から水を飲む時に、直接しゃ口に自分の口をつけるのではなく、片手で水をすくい口へ運ぶ（もつ片手はつかまり立ち用）。</p>	<p>9/26（7.3kg）</p> <p>9/28 10か月健診（発達順調。反応もよい。体重増加もよくなってきた）とのこと。</p> <p>10/9（7.25kg）。ミルクをやめ牛乳にする。</p>
11	<p>11/4 「さくらんぼ」園庭のスベリ台（高さ約2m余）の斜面をくりかえしすべりおろす。</p>	<p>11/6 空かんや箱にもものを入れたり、とりだしたりして遊ぶ。</p>	<p>11/6 遊びながらよくしゃべっている。</p> <p>11/17 保育者が「散歩に行こうよ」と呼びかけ、ワゴンを出していると、H児は芝生（約10m余）を自ら這ってくる。散歩にいくのが待ち遠しいみたい。</p>	<p>10/23 ミルクを全くやめ、牛乳のみにする。</p> <p>10/24（7.3kg）、11/7（7.5kg）</p> <p>11/18 下・左の側切歯。</p>
12			<p>11/24 絵本を読んであげている途中で他の子どものおしっこをかえに立ちあがると、「もつと読んで」とばかりにおこり出す。</p> <p>11/30 ひつじにむかってどんどん這っていき、毛をさわったり、ひっぱたりしている。</p> <p>12/3 リッチ（大きなコリー犬）にたいして、初めは「何だろう」とばかりに近づいたが、「ワン」とはえられ、2、3歩さがる。</p> <p>12/11 F児とソファをはさんで「イナイ・イナイ・バー」をしている。</p>	<p>11/21（7.65kg）、11/30（8.1kg）</p> <p>12/4（8kg）、12/14（7.8kg）</p> <p>12/18（7.9kg）</p> <p>12/5 下・右の側切歯。</p> <p>12/8～10 発熱のため休む。</p>

月齢	「移動能力」	手・足・指	音声・言葉・認識・感情・意欲・遊び・交流	健康・食事／その他
12		12/17 砂場で空かんにシャベル（小）で砂を入れている。		
13	1/7 つかまり立ちから一人立ちをし、そのまましゃがんでまた立つ。	12/22 スプーンを上から握り、食べる。	<p>12/21 「アッタッー」</p> <p>12/21 日課としている8つのリズム遊びや「高い高い〜」を何度も求めてくる。</p> <p>12/23 「おとうさんはどこ？」と聞くと、父親を指さす。「こっちだよ」と保育者が自分をさしても「ちがうちがう」とばかりに首を横にふり、再び父親を指さす。</p> <p>12/25 おもちゃのラッパを口にあててならないので保育者に「ふいて」とばかりにさし出す。保育者が「パッパッパッー」とふくまねをしてあげると、次には自分で「パアッー」と言いながら口にあてている。</p> <p>82年</p> <p>1/7 「もう、きゆはいらないの？」と聞くと、「うん」とばかりに首をたてにふり、哺乳びんをさし出す。</p> <p>1/8 「まためがね」と言うのと、そのかっこうをする。ものを指さして「アッタッー」。絵本の中の皿を見て、手をのばして食べるまねをする。</p> <p>1/9 G児とともに、テラスをこえ、芝生をおりて、土で遊んでいる。</p> <p>1/11 P児（6か月）におもちゃをわたしてあげている。</p>	<p>12/24（7.9kg）</p> <p>1/7（7.8kg）、上・左の第1臼歯</p>
14	<p>1/27 つかまり立ちからの一人立ちを何度も喜んでする。</p> <p>2/15 完全な一人立ち。</p>		<p>2/1 歌「ぞうさん」をうたってあげると、右手を体の前でふる。</p>	<p>1/19 歯：上8本（左右の中切・側切・犬・第1臼）</p> <p>下4本（左右の中・側切）。</p> <p>1/20、22～23 発熱のため休む。</p> <p>1/29（7.9kg）、2/8（8.1kg）、2/16（8.2kg）</p> <p>1/30 はしかの予防接種。</p> <p>2/13 哺乳びんをやめる。</p>
15	<p>2/19 3～4歩出る。</p> <p>3/9 2mほど歩く。直立が安定（しゃがんで立って、を喜んでくりかえす）。</p> <p>3/15 10mほど歩く。</p>	<p>3/8 片手（左右とも）で牛乳の入ったコップをつかみ、飲む。</p> <p>飲みおわると「もっと」とばかりに別のコップを指すので、保育者が別のコップに入っていた牛乳をH児のコップについてあげると、次にはそのまねをしてコップからコップへそそいでいる。</p>	<p>2/24 リズム遊び「めだか」のリズムに合わせ、直立で両手を体の前にくみあわせてふる。</p> <p>3/10 M児とともにふとんカバーについている動物の絵を指しながら、「ワンワン」などと言っている。</p>	<p>2/25 下・左右の第1臼歯。</p> <p>（8.25kg）</p> <p>3/8（8.3kg）</p> <p>3/13 生活リズムが1才児クラスの子どもとはほぼ同じになってきており、食事も午前11時すぎで充分に間に合う。</p>

月齢	「移動能力」	手・足・指	音声・言葉・認識／感情・意欲／遊び・交流	健康・食事／その他
			<p>3／12 うさぎ小屋の前にへばりついて2匹のうさぎの動きをみつめている。他の子どもたちが飽きて帰ったそうなので、保育者がH児も抱いてワゴンにのせようとするといやがる。「じゃあ、Hちゃん、バイバイ」と帰るそぶりをみせると、H児は喜んで手をふってバイバイをし、さらにうさぎをじっとみている。</p> <p>3／15 おやつ時に手を出して「チョーダイ」とはっきり言う。</p> <p>3／19 絵本の中の犬・猫・ひよこの鳴き声をまねる。</p>	

述内容についてもその場で複数の保育者が検討するようにしている。

それを夕方の迎えの時に（母）親が見て、日中の状況、特に睡眠や食事・授乳時間とその内容をつかみ帰宅する。しかも自分の子どもについてばかりでなく、他の子どもの欄も見られるわけだから、一人の子どもの変化・発達について複数の（母）親がともに喜び悲しむことも間々ある。

こうした簡略な記述だけで充分に通じ合わない部分については、朝や特に夕方の送迎の時に保育者と親との間で話し合うように努めている。目立った、しかもよい変化を認めた時は、（母）親がくるのをまちかねて特にていねいに話す。逆に子どもについて心配なこと、保育内容への不満なども卒直に出してもらるようにしている。ただ心配・不満を（母）親から話してもらうためには、保育者への一定の信頼が必要だし、その信頼は保育者が一人ひとりの子どもを心から大切にし、そしてその子どもが具体的に成長・発達していくなかでしか得られない。例えば、乳児期後半に入った子どもが朝泣かないで、にこにこして（母）親の手からすーと保育者の手に移ってくるようになると、（母）親は保育者に「今朝はこんなだった」とか「昨日帰ってから大変だったの」とか「うちの子、ここが心配なんだけど」等と話しかけてくれるようになる。

以上のようにして一日ずつ積み重ねた日課表の記述をある期間ごとに一人ひとりの児童票に書き写し、それを（前述の表1のように）3園合同職員会議に提出できるように整理する⁽¹²⁾。その一部を3名についてのみもう一度児童票の記述にもどり、4つの柱ごとにまとめ直したのが表2～4である。

- (2) 以上の作成経過をふまえ、表2～4について次の点を断わっておかなければならない。①これらの表は日常の保育のなかで、その保育の実際的一端を書きとめたいわばメモをもとにできたものであり、例えば田中らが作成した表⁽¹⁴⁾およびその著書の中で整理した諸々の文献⁽¹⁵⁾にある表のように、子ども（乳児）の発達を調査・診断するための表ではない。ただ、では何を記述するか？との点には、これまでの「さくら・さくらんぼ」の0歳児保育の実践的蓄積のなかで別表6のような項目を考えながら、同時に先の田中らの研究からも保育者としての立場からその一端を学んでいることが、寄与している。②きわめて忙しい時、たとえば保育者が昼食を5分に満たない間に、子どもの排泄の後始末などで断続するなかで食べなければならないような時は、別表5の中段部分に記入するだけでせいっぱいのことが往往にしてあったため、記録の時期的片よりがみられる。③メモということから、保育者が一人ひとりの子どもにどう働きかけたか？という点よりは、子ども自らの動きなどを簡略に記したものが多く、保育者の働きかけと子どもの変化とのいわば動的な理解を得にくいと思われる。④対象とした8名の乳児の月齢にも規定され、記録項目を多くが乳児期前半から後半への移行の時期及び後半に集中している。また各記録項目を4つの柱（欄）に仮分したが、ひとつの記録項目が必ずひとつの柱の中におさまるようなものではなかった。つまり4つの柱自体があくまで仮のものである。⑤表中の記述の多くが「～ができる、で

(別表・5) 0歳児クラスの日程表(一部)

198 年 月 日()

天気()

気温(午前9時:)

(午後2時:)

その他

離乳食献立表

	午前	午後
初期食		
中期食		
後期食		
完了食(普通食)		

食事 ◎ (おかわりするほど)
 ○ (普通)
 △ (少なめ)
 排便 □ (かたい)
 □ (やわらかめ)
 × (下痢)

名前			
寝た時間 ～起きた時間			
朝食	時間		
	内容		
	量		
健康状態 心配なこと			
一日の様子	午前 8 9 10 11 12 午後 1 2 3 4 5 6(時)	+	+
子どもの変化など			

(別表・6-1) 0歳児(乳児)の変化・発達の記録表(さくら・さくらんぼ保育園)

名 前		生 年 月 日		年 月 日	
入所時の祝診		入所年月日		年 月 日	
②手					
皮膚	血色はどうか 弾力性はどうか 湿疹は出来ているか	手を口にもっていく			
		握っていた手を開く ようになる			
表情	おだやか、しかめている、無欲状、顔の麻痺 等	手に物を握らせると それを持ち、ふる			
		目の前にあるものに 手を出して、つかむ			
唇・鼻・顎・耳の型に奇型はないか		手のひら、中指薬指 小指をつかってももの を握る			
目	眼瞼の型に変わったところはないか 目のまわりに浮腫はないか 斜視ではないか	5指で物をつかむ			
		3指で物をつかむ			
姿勢	正常で対称的か否か 非対称性があるかないか 後弓反張がないか かるいか つよいか 蛙体位がないか あるか	親指と人さし指でも のをつかむ			
		一方の手から他方の 手に持ちかえる			
①目・耳・表情		両手にものを持ち打 ち合わす			
項 目	月 数 (1, 2, 3, …12)	備 考			
明るい方をむく			③足		
一方をじっと 見る			あおむけで足をピン ピンさせる		
動くものを目で 追う			ひざの上で足をツン ツンさせる		
音のする方へ顔 をひける			うつぶせにしたとき 足の親指が床につい ているか		
あやすと笑う			足は左右対象かど うか		
あやすと声をた てて笑う			足をつく力が強い か弱い		
表情がゆたかか					
泣き方はどうか					

項 目	月 数 (1, 2, 3, …12)	備 考	項 目	月 数 (1, 2, 3, …12)	備 考
④全身運動 新生児の泣くときのふるえなど			段をはってのぼる (高さは何段か)		
自発的な手、足のふり、 運動について (病的にとられるものがないか)			段をおりられる (高さは何段か)		
首がすわる			ひとり立ちをする		
ねがえりをする (腕がぬけているか)			ひとり歩きをする (何歩か、歩き方は どうか)		
うつぶせで首をもち あげる (何分か)			しゃがみ腰ができる		
うつぶせで肩をあげ る (何分か)			ことば、認識及び集団性の発達		
うつぶせで腕が立つ (手をひらいている か)			ア—ア—、ウ—ウ— ……など声をだす		
腹ばいで動く 円をえがく ()			ゴニョゴニョとし きりに言っている		
腹ばいで後方にさが る ()			大人の口まねをして かたことができる		
腹ばいで前進する 1.両腕をついて動く			音節語がでる(種類)		
2.両手をついて動く			人見知りをする		
3.片腕で動く			指さした方を見る		
4.両手を交互につい て動く (両せい類ハイハイ)			指さしをする(具体 物と合わない)		
5.足の親指をついて いるか (手を開いているか)			指さしをする (具体物とあう)		
四つ足のハイハイが できる			手をパチパチする		
腰をしきりにあげる			手をバイバイする		
高ばいをする			手あそびの真似をす る その種類 (例) いないいないばあ とつめの にんぎに んぎ		
自分からお座りをす る			名前をよばれるとふ りむく		
つかまり立ちをする					
つたい歩きをする					

(別表・6-2)

項 目	月 数 (1, 2, 3, …12)	備 考	項 目	月 数 (1, 2, 3, …12)	備 考
ボールをころがすところ がしかえす			その他		
いれものに入っている ものを外へつかみ出す			歯はいつごろはえは じめたか		
自分のものがわかる (ふとん、くつなど)			大泉門がふさがった のはいつか(大いさ 膨隆又は陥没)		
まわりの子とかかわ りもち(内容) ○顔を見合わせて笑 う ○物を取りっこする ○まねをする ○何やらお話をし あう			眠りが浅いか		
ふりまわしたり、ゆ さぶったりすると笑 ってよろこぶ、いや がる			音にビタッと驚く		
			お乳をすう力が強い か弱い		
			そしゃく力はどうか		
			体を異常にそらすこ とはないか		
			既往症		
			突発性発疹		
			麻 疹		
			水 痘		
			その他の病気		

離 乳 食

月 齢	内 容	食べた量	食べた時の反 応とその変化	排 便 回 数 正常・異常	そしゃく力と 飲みこむ力	ミルク又は 牛乳の飲み 量(1回)	体 重

きた」というものが多い。保育の実際の場面では「できる(た)こと」は、その子どもの変化・発達の経過をたどるという意味では大切であり、何よりも保育者と父母の、そして月齢が高くなると当の子どもにとっての喜びであり、三者を結ぶものとなる。ただ保育としては、「できる(た)こと」の背景には実に記録しがたいもの・過程が存存しているように感じる事が間々ある。たとえば子どものまなざしを含む顔・表情の変化などは記述しにくいが子どもの状態をつかまえるうえで大切である。しかし、ここではその点に立ち入らないでおきたい。⑥記録した者(保育者)の姿が実はこれらの表の中に記録されているという面がある。たとえば保育者の健康状態のよしあし、保育者のある子どもへの態度・み方の如何などが何をどのように記述するのか、という点に関係してくる。しかし、この点についてもここでは立ち入らない。

(3) まずF児のケースをみてみよう。

彼の母親は「さくらんぼ」のベテラン保育者、父親は接骨院を営んでいる。両者とも忙しい毎日のなかで3人の子どもたちとの接触を大切にしている。家は「さくらんぼ」から自動車です20分ほどの隣村にあり、父方の祖母と同居している。

出産予定日を10日以上すぎても生まれなかったため、陣痛促進剤を服用した。

産後、母親に腰痛症が現われたこともあり、8週間の産後休暇をさらに1か月間延長した。その間はF児を母親がみていたため、前述のように'81年度の子どものなかでは入所が比較的におそくなり、'80年度末に生後3か月(以下3Mというように略記)半で途中入所した。

入所当初より保育者の働きかけに対して反応のいい赤ちゃんだった。F児のその後の変化・発達の経過を素描してみよう。

- ④ 哺乳力が強く食欲もありそうなので、3M末には離乳食への準備としてスプーンで舌ならしを始めた。その後4Mで緑便が連続したので、母親の要望も考慮に入れ20日間ほど離乳食を中止した(ここまでは'80年度の0歳児クラス担任者の)。再開後は順調に進んだ。月齢の高いA～D児が食事をしているのを見たら「ンマンマー」と言って這ってくる(8M)ほど食べることが大好きな子どもで、食べ物にどんどん手を出した。ある日午後食に大好物のうどんが出たので、それを何杯もおかわりしてお腹がはちきれそうになった。その後これも大好きな牛乳の入った哺乳瓶を全部飲みきらないで落しても、お腹があまりに苦しいために拾えなかったこともあった。

母乳は保育所で8Mまで飲んだ。

- ⑤ 1年間を通してほとんど休園しなかったこともあり、「移動能力」の発達は次のように順調だった。頸定3M、寝がえり4M、腹臥位での回旋は5M、同後退・前進、飛行機のような腹臥位、両生類ハイは6M、手掌支臥位・椅子座位は7M、つかまり立ち・伝い歩き・階段登り、大人がすわらせた二足座位は8M、つかまり立ちから座位への転換、四つ足ハイは9M、つかまり立

ちからの直立、高足ハイは10M、床からの直立、二足歩行は12M。

以上のなかでやや気がかりであったのは、体が比較的に関いこと、「腹パイ」を始めた頃に手指が開きにくかったことだった。

- ㉞ 感情・認識の発達には少なくとも6・7M頃から著しい。たとえば大きなボールを見て恐がる、2週間後にはそれを恐がらない、食事用シートを見ると這ってくる等のように、F児とあるものとのいわば直接的な結びつきが彼の中にはっきりとでき始めているのがうかがえる。

「移動能力」の獲得と認識の発達との関係を示唆することとして次の2つの記録がある。1つは、7M半ばから、それまでの保育者が抱いての食事をやめ椅子座位でのそれに移ったが、そのとたん、今までのようにスプーンで食べさせてあげようとしても口をあけず、その代わりに自分の手で何とかつかめたじゃがいも・人参・大根・ハンバーグなどの方を食べるようになった。2つ目は「クラスだより」6月23日付の次の部分である。「Fくんは6月に入っている頃から、それまでの飛行機のようなうつぶせ姿勢から、左右の手足を交互に出す両生類ハイを始めました。すると1週間もしないうちにスピードがつき、今ではあの広い0歳児室を端から端まで、月齢の高い子どもたちが食事をしている所やおもちゃなどの目標をめざしてあっという間に移動します。そのため足指の皮がむけるほどです。またそれにとまって、『アッアッ』と大きな声を出して喜びを表わしたり、要求を示すことが目立ってきました」。

感情・認識面での記録項目の数は9・10M以降に目立って増える。たとえば指さしや言葉の現われは9M、太鼓と他のおもちゃを組み合わせた、椅子をつかってテーブルの上に登るといった、いわば少し頭をつかったことができ始めたのが10M、保育者の歌やリズムに合わせてうたったり手遊びをするという模倣力の高まりは9Mから、保育者がワゴン（大型の乳母車）を出してくるのを見ると散歩に行きたいという要求を泣いて表現したり、食事用エプロン（おかけ）をつけるといやがる等の、保育者がする、一定の動作・働きかけに対して自分の感情をはっきりと表現しだすのが少なくとも9Mから認められる。こうして保育者とF児との間にある物・動作・音声・言葉などをはさんだ関係ができていく。そのことは保育者にとってみれば、文字どおり眼のまわるような忙しさのなかでたとえ少々体がきつくても、保育というか、子どもたちと一緒にいる時が楽しくてしょうがないと感じる時期が、少なくともこの頃から始まったということでもある。

こうした保育者とF児との関係・結びつき・交わりがさらにこくなっていくとともに満1歳の誕生日をむかえる5月には、それまでのように保育者の設定した場面、保育者の言葉かけによってではなくF児が他の子どもとの関係・交流の下に自ら遊びをつくり出し始める。もちろんその際にも、安全の確保などの配慮と、さりげなく室内から芝生へ誘うといった心づかいは保育者に必要であるが。

そのなかで、恐いけれど保育者の体に手をふれていれば安心する、母親に抱いてほしいとぐずる、保育者がしかるまねをすると逆にぶってくる、散歩に出かけてみちくさをくう、といったいわば人間的な弱さや「受動性」⁽¹⁶⁾をも含んだ諸々の感情が育ってくる。また、落としたものを後で拾いにもどる、自分が遊んでいる木馬に他の子どもが近づいてくると木馬をよそへひっぱっていく、絵本をみて楽しむ、などの人間らしい知恵・賢さが目立ってくる。さらに様々な場面での模倣力の現われと言葉の明確化を含んで、F児らしさとでもよぶべきものが誰にも感じられる子どもになっていった。

(4) 次にG・H児の場合を検討してみたい。

彼女らの父親は群馬県職員で「さくらんぼ」後援会の会長、母親は深谷市隣村の公立保育所のベテラン保育者。4歳上の兄も0歳児期から入所しており、保育園に理解と協力を示してくれる家庭である。

長期の避妊の後に妊娠誘発剤を使用したことも影響したのか、彼女らは一卵性双生児として生まれた。すでにみたように胎生期・新生児期にはその後の成長・発達を考えるうえできびしい条件を幾つか負っていた。そのこともあり、また双子ということもあり、母親は産後休暇も含め出産後1年間の育児休業[※]をとったが、2人の発達を考えると狭い部屋に一日中親子8人であることはさけ、空気・日光・空間・人間的働きかけを保障することが我が子らには必要とおもい、4Mで「さくらんぼ」に入所させることにした。

※ 1976年4月1日より、通称「育児休業法」と呼ばれる「義務教育諸学校等の女子教育職員及び医療施設、社会福祉施設等の看護婦、保母等の育児休業に関する法律」が実施され、許可制・無給・対象限定などがかかえてはいるが、出産後1年間の休業期間が保障されることになった。G・H児の母親が勤める村立保育所（同村内には計4園）では初めてのケースだったという。

2人は一卵性双生児だが、入所時の印象ではG児がどちらかといえば父親似、H児が母親似で、担任保育者にはいわゆる瓜二つにはみえなかった[※]。姉のG児はにこにこしているが声を出すことはあまりなく、入所時すでに4M半ばすぎというもあり、しきりに寝がえりをしようとしていた。また保育者らが眠り姫と呼ぶぐらい当所はよく眠っていた。皮膚のつやは悪いようにみえた。他方、妹のH児はあやすと声を出して笑い、喃語らしきものがよく出ていた。

※ だが他の保育者らは入所時も、またその後もしばらくの間2人を区別できないと言っていた。次年度のU・V児の双子はさらによく似ていたが、この場合も担任保育者にはちがいがよくみえ、彼女ら4名の保育をしていくなかで、「双子っていうけれど本当にこんなにちがっているのか」と感じさせられることが頻繁とあり、保育者の脳裏からしだいに双子ということは忘れられ、4名の別々の子どもという面が前に出てきた。このことから考えるに、

科学的な裏づけはないし、証明もできないのだが、保育者と子どもとの最初の出会いの時に何をどのように保育者が感じるか？という点に、両者のその後の交わりの質と量とが集中的に現われているという面が保育という営みの中にはあるのではないだろうか。このことが、その後の日常の保育のなかである子どものことを積極的につかんでいくという努力を放棄するものでないことは当然であるが。さらに論理の飛躍が許されるならば、ある保育者とある子どもとの「相性」と呼ばれる事柄を、宿命論におちいらしないで、教育学の問題として考えることはできないか、ということへも上記の事柄は結びついていく。

ただ共通して四肢が細く、その末端部にチアノーゼがみられた。加えてミルクを飲む力が弱い上に、飲むとすぐに吐くことが目立った。なお母乳はほとんど飲んでいない。G・H児のその後の変化の発達の経過を追ってみたい。

- ① 上述のミルクを飲むと吐くという点を保育者は心配しておりよく来園した小児科医の診察を受けたが、幽門狭窄症などではなく今後の2人の成長のなかでしだいに直っていくということであった。母親は割合にのんびりしており、「お兄ちゃんも初めはよく吐いたが、1歳にならないうちに直ったよ」と言っていた。結果として6月に入ると吐くことは減っていき、未熟な保育者は父母[※]から子どもを育てるうえで大切なこと・態度を学ばせられた。

※ 双子を育てる両親の苦労はひとしおであろうが、そのなかにも子育てのカラーとも呼ぶべきものが理式的にはいろいろとみられる。別表2のU・V児の家庭では各々がどちらかと言えば自分に似ている方をお母さん子、お父さん子として育てていった。c・d児の場合は、ほとんど母親まかせだったのが、保育所に入ってからしばらくして父親も子育てにたずさわるようになった。H・G児の両親は、これらとはまたちがい、父親はその時々に関心して自分に対して反応のよい方をおもしろがり、母親は他の方をみるようにしていた。もちろん、おそらくは各々にたいする愛情にちがいはなく、上記の点を意識すらしていないだろうが。いずれにせよ、保育・育児はこうした両親の努力と保育者との結びつきをひとつの にして互いに学び合いながら、いわば試行錯誤的に行なわれるものであろう。

入所後2～3カ月するうちに2人とも哺乳力がつき、離乳食にもしだいに慣れていったため、入所後あまり増加しなかった体重もしだいに増え、両親と保育者を安心させ喜ばせた。それにともない「移動能力」も表8・4のように、仮にF児と比べればややおくれながらも、ほぼ同様の道順で獲得されていった。

入所3カ月目の2人の成長・発達の一端を次の6月の「クラスだより」から払い出してみよう。

「これまであまり体重の増加がみられなかったGちゃんは、18日に測定したら一度に500gもふえて5.95kgになっていました。本当によかったね。うつぶせの姿勢でワゴにのって散

歩に出かけると、30分以上もの長い間ずっとうつぶせで遊べます。4～5月ごろ少し目立った吐くことも、このところ以前に比べ少なくなってきたようです。うつぶせ姿勢で眼前におもちゃがあると一所懸命に左右の手を交互にのばしとうとうと、円をえがくように動き始め、23日にはついに2mほども前進することができました。Fくんのように動き回れるようになるのもすぐでしょう」。

「Hちゃんは6月中旬に入ってから、両手指をしっかりとひらき、足指を床につけ体を支え、顔を真正面にあげ胸をうかせた、きれいな左右対称のうつぶせ姿勢をとり始め、今では片手で体を支え、片手でおもちゃをつかみ長い間遊んでいられるほど安定してきました。それにともない顔がいっぱいふえ、散歩にいても他のクラスの保母さんから『Hちゃん、Hちゃん』と呼ばれてにこにこしています。体重も5月の連休あけに軽い病気のため少し減った以外は、少しずつですが順調に増加しています。Hちゃんもうつぶせで円をえがくように動いたり、後ろへさがったりしていて、19日には少しだけ前へ出ました」。

このようにしだいにいわば「さくらんぼ」の赤ちゃんらしくなってきた2人だったが、その後も月1回ほど発熱をくりかえしていたことが心配であった。

- ⑩ そのなかでH児は7Mに林万り医師の発達診断を受け、手・足の弱さを指摘され、「腹バイ」をたくさんするように言われた。ちょうど薄着の可能な季節だったこともあり、保育者は彼女をテラスや、その春にうえたばかりで文字どおり新芽とでも呼ぶべき芝生へつれ出して遊ぶように努めた。腹臥位の安定・充実のなかで7M末には一度に何mも「腹バイ」で進めるようになった。スベリ台に登ろうとする、椅子座位の食事で食べ物に手を出す、という、積極的な行動とともに、母親をみてにこにこする反面で知らない人をじっとみつめる、他の子どもと顔をみあわせて笑うなどの感情・認識・交流面での発達をとげていった。

他方で、G児もまだか細い手足ながらも7Mで「腹バイ」をする、母親をみてにこにこする、保育者に食べさせてもらうのではなく自分の手でつかんだものを食べる、8Mで食事用シートをみて這ってくる、スベリ台にいどむなど、H児とはほぼ同様にその発達が順調にいき始めた。

ところがそのやさきに2人は発熱し、その後は父母の夏休みのため、休園が10日間ほど続いた。

- ⑪ 久しぶりの登園で保育者を驚かせたのは、休園前にようやく意欲と動きの出始めていた2人が、休園後、一方のG児は一人座位が可能となり座ったまま、他方のH児はつかまり立ちをしたまま、じっと動こうとしないことであった。ほぼ同月齢のF児が半年ほど先に生まれたA～D児と一緒に遊びたくて意欲的に這っていくだけに、座ったまま、つかまったままのG・H児の姿はよけいに目立った。

たしかに座位およびつかまり立ちは0歳児（乳児）が「移動能力」を獲得していく過程で大

切なステップのひとつである。また座位については、それが「人間が人間に意図的にとらせなければ十分にできないといわれる大切な体位で、さらに次の階層における直立二足歩行とともに、人間としての特徴的な活動を充実させて移動をおこなっていくために必要な体位⁽¹⁷⁾」だとする主張もある。だが保育の実際においては、「ハイハイ」特に「腹バイ」のなかで培う諸々の能力・意欲・感情・認識などを、0歳児一人ひとりのその後の成長・発達にとって必要なだけという意味で充分にはぐくむ前に、座位を保育者・大人が積極的にとらせてしまうと、どうしてもいわば動きの少ない子どもになりがちだと思われる。

言いかえれば、乳児期後半にある子どもを、少なくとも彼が目覚めている間は、本来的にいわば静的ではなく動的な存在、あるいは動的な面が主要な存在であるにとらえると、その彼が主に肉体的には一たんは困難な「ハイハイ」特に「腹バイ」を（話はややとぶかもしれないが、大人もこの「ハイハイ」を自らやってみると、それが実に変なものであり、そのなかでも「腹バイ」が肉体的に最もきついものであることがわかるであろう）、おそらくは無意識的にも避けないだけの条件をつくり、彼が自己の「諸能力および言気器官の内部からの発達」にそう形で、つまり「自然の性向」⁽¹⁸⁾にそって「移動能力」を得ていくよう援助する点に、0歳児（乳児）保育のひとつの課題があると思われる。もちろんそうだからといって、どんな環境におかれた、どんな発達上の条件をもったどの子にたいしてもやみくもに這わせればよいのではなく、一人ひとりの子どもの発達上のちがいを考慮に入れ、しかも例えば一定の目標を子どもの前に示したりして、子ども自らが楽しく感じられる場面で上記課題を設定することも、保育者の力量のひとつであろう。

このように「さくらんぼ」の保育者らは考え、G・H児にもできるだけ動きのある場面へと誘うように努めた。

- ① 9・10M以降の2人の変化・発達の経過の多くは、基本的に前述のF児のそれと重なるので略する。ただG児が12Mで発熱をくりかえした後医師から、肺炎と診断され、20日間ほどを休園せざるをえなかったことは、保育者に対してその初歩的観察・注意の不足をきびしく迫るものであった。健康という土台なくしては、F児のところで述べたような9・10Mから満1歳前後への様々な人間的な側面も花開かないこと、また乳児期後半に入ったら子ども自らが楽しいと感じ、表現するような保育所生活のなかでその土台をつくっていくことの大切さをG児から教えられた。

＜おわりに＞

① 0歳で入所した18名および1～2歳で入所・再入所した15名計33名の子どもたちの、主に誕生をめぐる入所までの若干の調査、② 前18名からとり出した3名の入所後1年間の発達過程

の素描、以上の2つから、「生まれの弱さ」を背負った子どもを0歳児（乳児）期にあずかる専門機関のひとつである、保育所での保育内容を検討していくうえで、少なくとも次の点が示唆されているであろう。

- ① 本来、出産は親子双方にとって人生における最大の難関と呼んでよいものであろう。それが先の④の調査によると、彼らのほとんど全員の母胎（体）内環境がいわば一定の危機的狀態にあり、そのことも関係して、母親からみれば出産・分娩時の、彼らからみれば出生時の異常要因が目立っており、出産・出生をめぐる状況をさらに難しいものとしていることがわかる。「ますます有害の度合を増している今日の環境が、幼い子供たちやまだ生れぬ子供たちの健康にどのような影響を及ぼすかについて、深く考えなければならない時期に、私たちは立たされている」⁽¹⁹⁾という指摘を、とりわけ0歳児（乳児）の育児・保育にたずさわる人々は真剣に受けとめねばならない状況下にあることを先の調査は例示している。妊娠・出産・育児（保育）という営みにとって好ましい、諸条件のさらなる実現とそのための深い知見を得る努力が保育者らに求められている。
- ② 一人ひとりの子どもがそうした「生まれの弱さ」を克服していくのを援助するためには、家庭・行政・保育所その他の専門機関の場にいる人々が各々の専門性を生かしつつ、個々の子どもの育つ条件を保障するという点で結びつきを強めなければならない。
- ③ その際、保育所保育の内容が、0歳児（乳児）の「諸能力および諸器官の内部からの発達」を保障するために、彼らの「自然の性向」⁽¹⁸⁾にそうものとなっているかどうか、を個別に吟味しなければならない。具体的には例えば先の⑥を念頭におくと、i) 日光・空気・空間などの環境条件が0歳児の発達にとってふさわしいものであるかどうかということ。ii) 乳幼児の成長・発達を保育の場でとらえる際に、0歳児（乳児）の場合、彼らの入所後から1歳をこえ半ば前後にいたるまではひとつの発達上のまとまりらしきものをもっていることが感じられる。さらにそのなかで、生後6・7か月をひとつの境に、保育活動の重点が、それ以前は、「世話をする」「面倒をみる」ということにあったのが、少なくともそれ以降は、彼らが急速に人間的存在へと近づいていくことにより、ある子どもと特定の保育者、その子どもと他の保育者、その子どもと他の子ども、その子どもと他の子どもたちという順に形成される交わり・交流のなかで生じる「ともに遊ぶ」ということへと移っていく。このことから少なくとも2つの点を検討しなければならない。1つは、例えば4月の年度当初のクラス編成を1年間そのままにしておき変えないということが、0歳児（乳児）の発達にとってふさわしいものであるかないかという、0歳児クラスの編成のし方に関する問題である。2つは、0歳児の保育所保育のいわば第1の特徴を、言いかえれば保育者の子どもへの働きかけの重点を、例えば、ある子どもに対して他の子ども（たち）の存在を保育者が意図的・積極的に認識させ彼らの交流を促すことにおくのか、それとも個々の子どもの自我の芽生え・育ちを保障するなかで彼がいわば自然に他の子ども（た

ち)の存在を認識することにおくのか、という問題である。iii)「移動能力」の新たな獲得はその子ども(乳児)のいわば内面の素地を形成するものである感情・意欲・認識などの発達をうながすことがある。しかもここでいう獲得という言葉は、単にできなかったことができるようになるのを意味するだけでなく、できるようになった事柄が充実し安定することも意味する。また逆に、内面的なものが芽ばえ育っていくなかで、「移動能力」の次のステップ獲得へと彼らをむかわせることがある。両者の関係をこのようにとらえるならば、例えば、乳児期前半から後半への移行の時間および後半の時期の保育において「腹バイを重視し、それを保育の中に積極的にとり入れる」という考えとそれにもとづく実践が、乳児期後半以降の子どもの発達の保障という点で一定の妥当性を有するものと思われるが、この点はどうなのかということ。

少なくとも以上の8点をいわば前提としたうえで、0歳児保育と家庭などでの育児との結びつきの実態・あり方についても検討を加えることが大切である。そしてそうした努力のなかで、0歳児(乳児)が「生まれの弱さ」を自ら克服し、その1歳・2歳の誕生日を父母・保育者らがともに喜びあえる幾つかの条件が作り出されるであろう。

〈注〉

- (1) たとえばクリストファー・ノーウッド(綿貫礼子・河村宏訳)『胎児からの警告―危機に立つ生命環境』(1982)を参照。また、藤井は妊娠時・分娩時の母胎(体)側のハイリスク因子及び新生児ハイリスク因子として40項目をあげるという(前川喜平『乳児健診の神経学的チェック法』32頁〔1979年〕)。
- (2) この点については、例えば田中昌人・杉恵『子どもの発達と診断』第1巻(1981年)、同第2巻(1982年)を参照。
- (3) 拙稿「0歳児の『移動能力』の獲得過程をめぐる問題」(『名古屋大学教育学部紀要―教育学科―』第31巻〔1985年〕)。
- (4) 田中昌人・杉恵『子どもの発達と診断』第3巻(1984年)。
- (5) 胎教については、例えば、田中昌人「胎教の検討(一)、(二)」(『教育学研究』第24巻第3、4号、1957年)、大島清『胎児からの子育て』(1983年)を参照。
- (6) 例えば、(1)の文献、T・バーニー、(小林登訳)『胎児は見ている』(1982年)、近藤四郎、大島清『人間の生と性』(1982年)、大島、前掲書等を参照。
- (7) この点については、井尻正二『ひとの先祖と子どものおいたち』(1979年)、『こどもの発達とヒトの進化』(1980年)、『進化とはなにか』(1982年)を参照。
- (8) その一例は、井尻、同上書(1980年)の斎藤公子・付言(144～149頁)を参照。
- (9) 「姉妹園」についての説明は、斎藤公子『子どもはえがく―さくら・さくらんぼ、姉妹園の子どもたち―』157頁(1983年)を参照。
- (10) 「さくら・さくらんぼ」の保育者(職員)の'74～'79年度の妊娠・出産状況の一部について

ては、井尻、前掲書（１９８０年）の斎藤付言（１４２～１４３頁）でふれられている。

- (11) 船川幡夫「低体重新生児についての統計的観察および在胎週別体重および身長の基準について」（『小児科臨床』１７巻、８７１～８７７頁、１９６４年）を参照。
- (12) 例えば、'８１年８月末の職員会議に提出した記録の一部は、斎藤公子編著『さくら・さくらんぼの障害児保育』xii～xx項（１９８２年）に、「調査表」として掲載されている。
- (13) ４つの柱のうち「移動能力」の仮の定義については(3)を、交流については、荒木美知子「乳幼児の発達と交流——その理論を中心に——」（『都立大学人文学報』１５０号（１９８１年））を参照。
- (14) 田中、前掲書第１巻、１８４～１８５頁及び同第２巻、１８２～１８３頁。
- (15) 田中、同第１巻２２～２４頁及び同第２巻、２６～２８頁。
- (16) この点については、坂元忠芳「発達における能動性と受動性」（東京都立大学教育学研究室編『教育科学研究』創刊号〔１９８２年〕）を参照。
- (17) 田中、前掲書第１巻、１９４頁。
- (18) ルソー『エミール』（邦訳『明治図書版』第１巻、１９～２０、２２頁〔１９６７年〕）参照。
- (19) C. ノーウッド、前掲書、５頁。